
GUILD -還るべき場所-

harukana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUILD - 還るべき場所 -

【コード】

N9032X

【作者名】

harukana

【あらすじ】

戦争が終結して20年。平和とは言い難いが、世界はとりあえずの平穏を取り戻していた。多くの人々は自分の生活を成り立たせるため、自給自足の日々を続けていた。そんな中、志を同じくした人々は一つの場所に集い、共同体として活動するようになる。後にこれはギルド（GUILD）と呼ばれ、世界各国に大小様々なギルドが生まれた。これは、そんな星の数ほどあるギルドの中の1つ、【雨宿り】と呼ばれる小さなギルドと、そこに暮らす人々の物語。

プロローグ 路地裏の出会い

煤けた臭いがする。空気はわずかに湿り気を帯びていて、暑さは別の肌にしっとりまとわりつくような汗が滲むようだ。

路地裏特有の空気の中、溶け込むようにしていくつかの人影が揺れる。

「ったく、手間かけさせやがって。クソガキが……」

苛立ちを見せながら一人の男が言った。

「まあいいじゃねえか。これでまたしばらく金には困んねえんだからよ」

もう一人の男がニヤニヤと笑いながら、足元へと視線を落とす。

そこには、気を失って倒れた少女がいた。歳は十代の半ばくらいだろうか、これと目立つような外見の特徴はない。

倒れた少女は完全に気を失っていた。

その頬には真新しい赤く染まった跡があり、それだけでこの場で何が起こったのかを理解するのは十分だった。

- - 人売り

数年ほど前から急激に件数が増えてきた事件だ。標的となるのは主に女子供で、中でも幼い少女は裏取引の市場で高く売買されているらしい。

標的とされるのはもっぱら、身寄りのない孤児や親を失った子供達だ。そういった標的に目をつけ、こうして人目につかずさらい、闇市場に流す連中がいる。この二人の男達もまさにそれだ。

「さてと。そんじゃ、足がつく前にとつと運んじまうか」

片方の男は足元に倒れた少女の襟首を強引に掴み、担ぎ上げた。

それはもう少女のことを同じ人としてではなく、ただの商品として

しか見ていないぞんざいすぎる扱いだつた。例えるなら、ゴミの詰まった布袋を面倒臭そうに持ち上げるかのような。

「行くぞ。今夜は港でパーティーが開かれるはずだからな。こいつにはそこで、しっかり稼いでもらわねえとな」

二人分の濁った笑い声が、人気のない路地裏のそのまた奥へと遠ざかる。まだ昼間だというのに、その先に続く道は黒一色に染まっていた。それはまるで、気を失った少女の行く末を暗示しているような闇だつた。

飲み込まれていく。自らの意志とは関係なく。そんな結末を望んだわけでもないのに。引きずり込まれていく。

……はずだつた。

「が……っ!？」

少女を担ぎ上げていた男が、突然前のめりに倒れ込んだ。肩の荷だつた少女も、男と同じように地面へと倒れていく。

「な、何だ!？ 何だつてんだ!？」

もう片方の男が慌てた様子で辺りを見回す。するとそこには、拳大くらいの大きさの石が転がっていた。どうやらこれが後頭部に直撃し、男は倒れてしまったらしい。が、重要なのはそこではない。

「ふざけた真似しやがって! どいつだ、出てきやがれ!」

路地裏の奥で男は声を荒げる。薄暗い路地の向こう、日の当たる方で何かが動く気配が確かにあった。それは

「……何してやがるはこっちのセリフだ。ふざけやがって」

「な……」

男はわずかに言葉を失つた。その声の鋭さに対して……ではない。「顔も悪けりや頭も悪い。頭が悪けりや品性も腐るってわけか。お似合いといえはお似合いだが、少しばかり道を踏み外し過ぎなんじやねえの、オッサン?」

「こ、の……っ！」

男の怒りがあらわになる。しかしそれも無理のない話だ。目の前に現れたのは、そこで気を失って倒れている少女といくつも変わらないであろう外見の……

「ふざけやがって、クソガキがっ！」

まだ幼さを残す、少年だったのだから。

「とんでもねえことしてくれやがって。覚悟はできてんだろっなあ！？」

「うるせえよ」

怒声とも罵声とも取れる男の声に、しかし少年はうんざりとした様子で一言だけ返す。

「自分のやったことは棚に上げて、人にどうこう言える立場かよオッサン。どっちがとんでもねえことしてるかなんて、説明しなかつて分かってんだろ？」

少年は抑揚のない声で淡々と続けていた。淡々としたその言葉の中には、しかし確かな苛立ちと怒りの感情が織り交ざっていた。隠そうとする必要なんてない。少年はただ、純粹に怒っていた。目の前の理不尽に対して。その理不尽が平然と繰り返される世界に対して。そして何より、こんな理不尽が日常の中で当たり前のように繰り返されていることに、今になってようやく気づかされた自分自身に対して。

「ガキが、ゴチャゴチャと……！」

男は腰に手を回すと、そこから薄暗い路地裏の中でも目立つくらいに銀色に光るナイフを取り出す。それを逆手に持ち、こめかみに青筋でも浮き上がりそうなほどに力を込めて強く握り、感情の赴くままに少年へと突進する。

「くたばれやああっ！」

路地裏は狭い。左右に動ける距離なんてたかが知れているし、障害物になりそうなものも直線状の距離には見当たらない。男がそのまま突っ走れば、その手の中のナイフは確実に少年の体のどこかしらに貫くだろう。どこに突き刺さるにしても、まともな結末が用意されているはずがない。

そんなことは少年も百も承知だった。だから、次の行動も非常にシンプルなものだった。

少年はただ、足元の砂を勢いよく前方に蹴りつけた。積もりに積もった埃や砂利、小石がまとめて宙を舞う。そしてそれらは、バカみたいに突進してくる男の視界を遮るには十分なものだった。

「ぐあっ!?!」

顔の正面から砂やら何やらをかぶり、男の足が止まった。ナイフを握っていない方の手で目元をこするが、そんな拳動をいちいち黙って眺めているほど目の前の少年の気は長くなかった。

ガズン、と。真正銘の徒手空拳、ただの一発のゲンコツが男の鼻っ柱をへし折るようにして直撃した。真正面からぶん殴られた男は、だらしなく鼻血を噴出しながら灰色の路地裏へと倒れていく。

「そのまま少し眠ってる」

すでに気を失っている男には聞こえていないが、少年は握った拳を崩さないままで吐き捨てる。

「ふざけやがって。他人の人生を何だと思ってるやがる。土足で踏み込まれた拳句、いらぬ結末まで用意されたんじゃたまったもんじやない」

それだけ言うと、少年は横たわる男には一瞥もせずに路地裏の奥へ進んでいく。先ほど石をぶつけて倒れた男も続けて無視し、その先に倒れるもう一人の下へと歩み寄る。

そこには、一人の少女が倒れている。これといって目立つ特徴のない、どこにでもいそうな同年代の女の子だ。

「よ、つと……」

その見た目よりもさらに軽い体を静かに背負つと、微かな呼吸だけを確認して一人咳く。

「待ってるよ。すぐに連れ出してやる」

聞こえないと知りつつ、少年は続けた。

「……お前みたいなヤツに、こんな日の当たらない場所は似合わねえよ」

プロローグ 路地裏の出会い（後書き）

まずは本作をご覧いただき、ありがとうございます。

ファンタジー小説ということで、本作GUIILDは連載を始めさせていただくことになりました。

このお話はおそらく、特別な何かにはならないと思います。

どこかで見たような物語に近づいていくと思います。

それでもひとまずは、自分なりに完結を目指してがんばっていきましょうと思っています。

こんな物語ですが、よろしかったらお付き合いください。

そして願わくば、どうか最後の瞬間を見届けてくれる読者の方が一人でも多くいますように。

手短ですが、これで挨拶とさせていただきます。

第一話 帰り道

「……………」
ゆっくりと視界が開けていく。ぼやけた瞼をゆっくりとこすると同時に、体のあちこちに鈍い痛みが走るのが分かった。

「っ、痛……………」

開けた視界が再び閉ざされる。痛みが引いていくの感じながら、少女はもう一度ゆっくりと目を開けた。そこは

「……………ここ、どこ？」

まるで見覚えのない景色だった。屋内で、どこかの一室であることとはすぐに分かった。部屋の中はきれいに整頓されていて、自分が寝かされているベッドの他にもう一つ同じ大きさのベッドがあり、その間には机が置かれていた。

木目調の壁と床と天井。一ヶ所だけある窓はわずかに開いていて、その向こうからは真昼の日差しと仄かに甘い香りを含んだ春の風が流れ込んできていた。

「……………」

少女は一通り部屋の中を見渡すと、ゆっくりとベッドから降りて二本の足で立つ。体のあちこちに痛みが残ってはいるが、歩けないほどではない。

開きかけの窓に近づいて、ガラス越しに映る自分の顔を見て気が付く。左の頬にガーゼが張られていた。触れてみると、そこにはもうほとんど痛みはなかった。が、それで少女は思い出した。あの、路地裏の奥で自分の身に降りかかった白昼夢を。

「っ……………！」

思い出し、足が竦んだ。忘れていた恐怖がよみがえるように、嫌な汗が一筋、背中を伝って落ちていくのが手に取るように分かる。少女はそれを振り払うように一度、ぶんぶん頭を左右に振って気

持ちを切り替えようとする。そして恐る恐る、目の前の窓を大きく開け放つて……。

「……………あ」

途端に安堵した。そこから見える景色は見慣れない世界のものではなく、何年も時を過ごした馴染みある景色だったからだ。そんな少女の安堵を後押しするように、暖かな春の風が頬を撫でた。

「……………いい風」

思わず少女が口に出してそう呟くのと、部屋のドアノブが外側から開かれたのはほぼ同時だった。

「あら、気が付いた？」

反射的に身構え、少女は声のしたドアの方を振り返る。そこにいたのは、少女よりも一回り背丈の大きい女性だった。とはいっても、平均的な身長よりもやや背丈の小さい少女から見ての一回り大きいだ。

単純な身長だけ見れば、平均と同じかそれよりもやや小さいくらいである。

女性は少女よりも大人びており、どことなく大人な雰囲気をかもし出しているようにも見える。髪の色は明るめの茶色で、ちょうど肩の位置で切り揃えられたように長さがまとまっている。

「体は大丈夫？ どこか、痛むところはない？」

「あ、いえ……………」

女性の問いに少女はわずかに戸惑う。顔も名前も知らない人なのだから無理もないのだが、それでも目の前の女性が自分に危害を加えるような人ではないということは、その雰囲気で何となく分かっていた。

「あの、私……………どうして、ここに……………？」

「ああ、大丈夫よ、安心して。そうね……………事情の説明は、私よりも本人に聞いた方が」

「何を考えているんだ、お前は!!!」

早いかもしれないわねと続けるよりも早く、下の階からそんな怒鳴り声が響いた。

「え……と、今は……?」

おそろおそろ、少女は目の前の女性に訊ねる。対して、女性は苦笑いを隠し切れず

「……まあ、百聞より一見、かなあ……?」

「?」

小さく溜め息を吐いて、女性は頭を抱えた。

少女と女性が階段を下りてくると、そこは一種の戦場だった。

「何度も言い聞かせてきただろう。単独で、しかも手配中の犯罪者に手を出すなんて、何を考えているんだ!」

「だから、何度も言ってるだろ! そいつらを捕まえるために」

「そういう話をしているんじゃない! 今回はたまたまお前も彼女も無事で済んだからよかったものの、一歩間違えれば大怪我じゃ済まない話になっていたかもしれないんだぞ!」

「っ、いいじゃねえか、こうして大丈夫だったんだから! それに、俺だって騎士の端くれだ! 手配中の犯罪者をみすみす見逃すなんて、そんなバカな真似できるかってんだ!」

「見習いになったばかりだろう! そういうセリフは一人前になってから言うもんだ!」

「見習いだからってバカにすんな! 大体、アクセルは慎重すぎるんだよ! そんなんでよく騎士を名乗れるな!」

「偉そうな口を利くんじゃない! いいかキリヤ。お前のした行動は、お前だけを危険に晒すものだったんじゃない。そこるところを

お前は全く分かって」

「あー、あのさ。白熱してるところ悪いんだけど」

「うるさい！ リノは引っ込んでろ！」

と、二人が口を揃えて怒鳴り散らした直後、二人は同時に視界の中に少女の姿を捉えることになる。

「……………」

「あ、あの……………」

少女のそんな一言に、水を打ったように静まり返る室内。

「……………はあ。二人とも、少しは頭が冷えた？」

やれやれといった感じで、リノと呼ばれた女性がようやく胸を撫で下ろす。

「……………すまない。少し、騒ぎすぎたな」

「……………ふん」

とりあえず、これでようやく話ができるようにはなったようだ。

「驚かせてすまなかった。俺はアクセル。一応、このギルドのマスターを務めている」

少女とリノ、そしてキリヤを交えたテーブルで話は始まった。

「あなたの名前、聞いてもいい？」

「あ、はい」

少女の隣に座るリノが優しく聞くと、彼女は椅子に座ったまま両手を膝の上に付くような素振りをして答える。

「ハクアです。街の北にある、修道院でお世話になってます」

ハクアがそう名乗ると、リノとアクセルの視線が自然とキリヤへと集まった。

次はお前の番だと、声には出さずにそう言われているのだ。

「……………キリヤ」

まだどこか機嫌が悪そうな感じでそれだけ告げると、キリヤはさつさと視線を逸らした。そんな態度にわずかに呆れるが、しかし気にせずアクセルは話を進めていく。

「ハクア。君にとっては決していい記憶ではないだろうが、いくつか確認したい。先刻、君を襲ったのは……」

「……………はい」

小さな声で頷き、ハクアは首を縦に揺らした。

「あの人は……人売り、でした……」

「……………そうか」

答えを受け、アクセルは腕を組んで目を閉じた。人売りとは、読んで字のごとく人を攫って商売の道具にしている犯罪者達の総称だ。

二十年前に戦争が終結し、ようやく平和の兆しが見え始めてきたこの時代にも、こういった陰湿な犯罪は後を絶つことを知らないままだった。

特に人売りに関しては、ここ数年の間で飛躍的に被害の件数が増えてきている。街の治安を任されている騎士団も、この手の連中には手を焼かされているのが現状だ。

「連中、ほとんどやりたい放題ね。人気のない夜中ならまだしも、白昼堂々と行動に出るなんて……」

わずかに震えるハクアの肩に手を添えながら、リノは辛そうな表情で語る。

「……………やつらは単独では動かない。常に最低二人以上で徒党を組んでいるからな。分かっているのは、やつらがある程度組織だったものの傘下において、その中に指示を出している親玉がいるってことだけだ」

アクセルはそう言うが、それは結局のところ何も分かっていないのと同じことだった。これまでも何人もの人売りを捕まえてきたが、どれだけ問い詰めても連中は自分の上に繋がる情報を一切開示しない。

いや、知らされていないと表現したほうが正しいのかもしれない。中には三日三晩のおぞましいほどの拷問を受けても口を割らなかつた

者もいるらしい。

「どれだけ犯罪者を捕まえても、それだけで何かが終わるわけではない。完全に根絶やしにするには、遙か上で糸を引いている黒幕を、ひとまずは表舞台にまで引き摺り下ろしてやる必要がある。」

「アクセルもそこまでは分かっているのだ。分かっているのだが、どうにもならないというのが今の現状だった。」

「……………今のままのやり方じゃ、ダメなんだよ」

「と、ここまで口を閉じたままだったキリヤがゆっくりと口を開いた。」

「絶対に、今の俺達みたいなのを見てどっかで笑ってるヤツがいる。そいつを引っ張り出して、二度とこんなふざけた真似ができないようにしてやらないと……………そうでもしないと、こんなのがいつまでだつて続くことになっちゃう」

「……………」

「アクセルもリノも無言だったが、それは肯定と同じ意味だった。誰かがどうにかしなくちゃいけない。そんな問題は、きっと世界中に溢れ返っている。きっと、多くの人達がそれをいつかはどうにかしなくちゃいけない問題だということは分かっている。」

「分かっている、何もしない。何もできないでいるだけ。自分にはできないから。どうせ他の誰かがやるだろうから。きっと、その繰り返しだ。誰も悪くない。」

「……………だけど。それでも……………」

「……………ふざけんなよ」

「キリヤは思う。」

「ふざけんじゃねえよ」

「キリヤ……………」

「キリヤさん……………」

「キリヤは一度だけハクアとの視線を合わせ、すぐに外した。」

「……話はここまでだ」

アクセルは組んだ腕を静かに下ろし、溜め息とともに言う。いつの間にか、窓の外はうつすらと夕焼け色に染まり始めていた。

「キリヤ」

「ん？」

「ハクアを修道院まで送ってやれ。もうすぐ日が暮れる。一人で帰すのは危ない」

「……いいのかよ、俺で」

「そう言うな。任せたぞ」

「……ああ、分かった」

二人の会話はそれで終わった。キリヤは椅子から腰を上げ、壁に立てかけてあった自分の剣を腰に提げると、向き直ってハクアに言う。

「行くぞ」

「は、はい……」

夜が近いせいもあってか、大通りは多くの人々で賑わいを見せていた。ここは街の中でも多くの商店が軒を連ねる中央通りで、朝から晩まで多くの商人と買い物客で溢れ返っている。

そんな雑踏から少し離れた道の上を、キリヤとその一步後ろをハクアが歩いている。

「……」

「……」

ガヤガヤと喧騒が響く中、二人の間に会話らしい会話は何も無い。というよりも、キリヤがずんずんと先に歩くのをハクアが黙って着いていつているだけだ。街の北にある修道院まではもう少し距離がある。街の中央通りを突っ切るのが一番の早道ではあるのだが、この雑踏では逆に時間がかかってしまうので、今は比較的人ごみの少

ない道を歩いている。

「……………」

「……あの」

ハクアは一步先に行くキリヤの背中に小さく声をかける。

「ん？」

その声に気づき、キリヤは歩く足を止めた。

「その……………リノさんに、聞きました。キリヤさんが……………私を、助けてくれたんですね？」

「……………ああ、そのことが」

答えはしたが、キリヤの表情はあまりよくはない。そんな表情の変化には気付かず、ハクアは言葉を続ける。

「今更ですけど、ありがとうございます。キリヤさんがいなかったら私、今頃どうなっていたか……………」

「……………どうだろうな」

「え……………？」

キリヤの答えに、今度はハクアが表情を崩す番だった。

「……………悔しいけど、アクセルの言うことは正しいんだ。今回はたまたま、運が良かっただけの話だからな。一步間違えれば、俺だけじゃなくてお前も……………」

キリヤはわずかに目を伏せる。分かっていたことだ。後先を考えずに首を突っ込むことは、いつか自分の身を滅ぼすことに直結するのだと。それが自分の身を滅ぼすだけならまだいい。自業自得だと笑い飛ばしてしまうこともできたかもしれない。

だが、そうじゃなかった。偶然かもしれない。けれど確かに、確実に、巻き込まれる誰かがそこにいる可能性は常にある。そのことを全く考えていなかった自分に、今更になって腹が立つ。口先だけの強がりをつけていた自分が、どうしようもなくやるせない。

「……………俺は、お前を助けてやれたつもりでいた。けど、それは勘違

いだ。俺はまだ、何も救えてないし、救う覚悟もない。俺は……俺は、ただ………」

「………そんなことないです」

言いかけたキリヤの言葉を遮ってハクアが言う。

「少なくとも私は、あの場所にキリヤさんがいてくれたから今こうしてここにいます。ここにいたことが、できるんです」

「お前………」

「………アクセルさんの言葉を借りるのであれば、確かにそれは危険なことだったのかもしれませんが。でも、キリヤさんは私を助けてくれました。助けてくれたじゃないですか」

「…………」

「………偉そうなことを言ってますいません。でも………そんな風に、自分の何もかもを、否定したりなんてしないでください。だって、そうじゃないですか」

小さく息を吸い、ハクアは続ける。真っ直ぐに、目の前にいる確かなその人に向けて。

「………誰が何と言おうと、キリヤさんは私を助けてくれました。他でもない助けられた私がそう信じていれば、それはきつと真実なんですよ」

「………そうか」

「はい」

「なら、きつと、そうなんだろうな。他でもない、お前がそう言うのなら………な」

そう言っつて、ようやくキリヤは少しだけ笑えた気がした。そして、同時に思った。ハクアを助けることができ、良かった。今は、それだけで十分だった。

第二話 名前

修道院の正門が見えてきた。

「あ……………」

同時に、その奥に一人の女性の姿を見るやいなや、ハクアは早足で駆け寄ってその名を呼ぶ。

「エリーナさん！」

その声に気付いてか、玄関先で掃き掃除をしていた修道服に身を包んだ女性が振り返る。

「あなた……………」

手にしていた箒をその場に放り投げ、真正面から駆け寄ってくるハクアと同じ視線の高さに膝を折ると、そのまま勢いよく胸の中に抱きついてくる少女をしっかりと迎え入れる。

「ハクア！ あなた、今までどこで何をしていたのよ！ 本当に心配したんだからね!？」

腕の中でハクアを抱き止めながら、しかしわずかばかりに声色を張り上げてエリーナは言う。

「昼間にお使いを頼んでから、全然戻ってこないんだもの。他の皆も、神父様だつてとても心配なさっていたのよ？」

「ごめんなさい、エリーナさん。でも……………」

そこまで言いかけてハクアは言葉を止めた。まさか人売りに襲われていたなんて正直に話したら、目の前のエリーナはショツクのあまりにこの場で卒倒するかもしれない。どう説明すればいいのかと迷っているところで、助け舟が来た。

「そいつを責めないでやってくれ」

二人の様子をすぐ後ろで眺めていたキリヤが言う。

「そいつは何も悪くないんだ。むしろ、被害者の方なんだからな」

「あなたは……………それに、今のは一体、どういう……………」

エリーナがそこまで言いかけたところで、修道院の正面玄関の大きな扉がギイと音を立てて開いた。そこから姿を現したのは

「エルザード様……」

「神父様……」

二人はその男の姿を確認し、口々にそう呼んだ。男性用の修道服に身を包んだ、やや初老の感が伺える男だ。歳の割には背丈が高く、髪の毛は灰色だがあちこちにつつすらと白髪のようなものが見取れる。縁のない眼鏡をかけ、首からは銀の十字架を提げ、手の中には分厚い教典が抱えられていた。

「おお、ハクア。良かった、無事でしたか。夕暮れになっても戻ってこないから、念のため騎士団の詰め所に伺おうと思っていたところでしたが、どうやらその必要もないようですな」

エルザードと呼ばれた神父は柔和な笑みを浮かべ、ゆっくりと近寄ってくる。

「しかし、一体どうしたのです？ こんな遅くまで、どこか寄り道でもしていたのですか？」

「それは……その……」

エルザードに問われ、ハクアは再び返す言葉を見失って下を俯いでしまう。その様子がおかしいことに何となく気付いたのでだろうか、エリーナとエルザードは互いに顔を見合わせると、すぐにその視線の先をその場にいるキリヤへと切り替えた。

「失礼ですが、あなたは？」

「……キリヤ。街の南にあるギルドに所属している騎士見習いだ」

「まあ、そうでしたか。では、あなたがこうしてハクアをここまで送り届けてくれたのですね？」

見習いとはいえ、騎士という肩書きのせいもあるのだろうか、エリーナは警戒心を解いたようにわずかに顔をほころばせて聞き返してきた。

「……それについては、もう少し説明に補足がある。ただ……」

言いかけ、キリヤはハクアに視線を移した。

「お前は、無理に立ち会う必要は……」

ないんだぞと言うよりも早く、ハクアは首を小さく左右に振った。「いいえ、私も、自分の口からちゃんと話します。そうじゃないと、たくさん心配してくれたエリーナさんや神父様、他の皆さんにも申し訳がないです」

「……分かったよ」

小さく溜め息を吐いて、キリヤは頷いた。

「……どうやら、少し込み入った事情があたりそうですね」

何となくただごとではない雰囲気を感じ取ったエルザードが、眼鏡を人差し指の腹で押し上げながら言った。

「どうぞ、中へ入ってください。この時間なら、一般の参拝者の方も来ることはないでしょう。シスターエリーナ、あなたはハクアとキリヤさんに何か暖かい飲み物を出してあげてください」

「かしこまりましたわ」

言われてエリーナは一足先に修道院の中へと戻っていく。

「さあ、どうぞ。何もありませんが」

そう言っただけで促す神父に続き、ハクアとキリヤは招かれるがままに修道院の中へと入っていく。

修道院の中はがらんとしていた。木目調の床の上には、中央に真っ直ぐ続く赤い絨毯が教壇まで伸びており、その左右には長椅子がいくつも配列されている。教壇のさらに奥を見ると、その頭上には色鮮やかなステンドグラスが七色に光っていた。ガラスの中に描かれているのは数羽の白い鳩と、白い翼を生やした女性……いわゆる天使と呼ばれる美しい女性の姿だった。

芸術なんてものに全く興味もなく、どの宗教にも加入していない、そもそも神様なんてものを真面目に信じたことなんて一度もないキリヤだったが、そのステンドグラスは素直にきれいなものだと思うことができた。

「どうぞ。こちらの席へ腰掛けてください」

先に行くエルザードに促され、ハクアとキリヤはそれぞれ教壇に程近い場所の長椅子に腰掛けた。間もなくして奥の扉から、人数分の紅茶をトレイに載せたエリーナが戻ってきた。それぞれの目の前に白いカップが置かれてから、エルザードは静かに口を開く。

「では、早速ですがお聞かせ願えますか？ 一体ハクアに、何があったのかを」

その問いを受け、キリヤは口を開く。

「実は……」

キリヤは今日の昼間に起こった一連の出来事をおおまかに説明した。手配中の犯罪者にハクアが襲われ、攫われそうになったこと。たまたまその犯人を追っていたキリヤが、結果としてハクアを助けることになったこと。そして今までの時間、ハクアをギルドの仲間と一緒に介抱していたこと。夜も近くなってきたので、こうして修道院まで送り届けたこと。

その全てを聞き終えて、エリーナは少なからず顔を青くしていた。エルザードは無言のまま言葉を聞き続けていたが、その表情には確かな不安の色のようなものが見て取れた。

「……大体こんなところだ」

「……そうでしたか。そんなことが……」

吐き出すようにして呟いたエルザードの表情は、さっきよりもずいぶんと老け込んでしまったように見えた。本当に心の底から、ハクアの身を案じていたのだろう。

「……神父様、エリーナさん。ごめんなさい、私……私が、もっと気を付けていたら、こんなことには……」

「いえ、いいですよ。あなたは何も悪くありません、ハクア。悪いのは、そうだった行いを良しとして平気で行える人の心と、それを許容してしまっている今の世界の方なのですからね」

「そうよ。あなたは何も悪くないわ。もとはと言えば、私がおあなたにお使いなんて頼んだりしなかったら、こんなことには……」

言いながら、エリーナはそっとハクアの肩を抱き寄せた。

「あ……」

何か言いたそうなハクアの言葉を遮って、エリーナはもう一度、少しだけ強くその体を抱きしめる。

「本当に……無事で良かった。あなたに何かあったら、私は、私は……」

その手がわずかに震えているのが、ハクアには分かった。

「……ごめんなさい、エリーナさん。ごめんなさい……」

エリーナはハクアのことを実の妹のように可愛がっていた。血の繋がりがこそないものの、この修道院で何年も一緒に生活を送ってきた、家族のような存在なのだ。そしてハクアもまた、そんなエリーナを本当の姉のように思ってきた。二人の間にある絆は細いが、とても強い。

「ひとまずは、あなた達が無事で何よりでした」

ようやく顔を上げたエルザードが、ハクアとキリヤの顔を交互に見据えながら言う。

「キリヤさん、改めてお礼を言わせてください。ハクアを救ってくれて、ありがとうございます」

「……よしてくれ。俺は、そんなんじゃ……」

言いながら逸らした視線の先で、今度はハクア目が合った。相変わらずハクアは、小さく微笑んでくれるだけだった。

「……俺、そろそろ戻るよ。やらなくちゃいけないこと、まだ残ってるから」

「そうですか。途中まで送りましょうか？」

「いや、いいよ」

「分かりました。では、お気をつけて」

キリヤは修道院を後にする。外はすっかり日が落ち始めていたが、夜と呼ぶにはまだ早い。そろそろ帰らないと、夕飯の時間に遅れればリノがまたうるさくなる。ギルドで生活を共にしている他の仲間達も、もうすぐ戻ってくる頃だろう。

「キリヤさん！」

そんなことを考えながら歩き始めたキリヤの背中を、ハクアの声呼び止めた。返事はせずに振り返ると、ハクアが修道院の入り口の正門の辺りまでやってきていた。

「……何か用か？」

「あの、今日は本当に、色々ありがとうございます。アクセルさんやリノさんにも、よろしく伝えてください。それと、今度改めとお礼に伺ってもいいですか？」

「そんなに気にすんなよ。それに、いちいち街の反対側まで来るのも面倒だろ？」

「そんなことないですよ。私、歩くのは好きですから」

「……まあ、別に構わないけど」

「はい。じゃあ、今度必ず」

「その時は、変なやつらに絡まれるなよ」

「あう……き、肝に銘じておきます……」

あははと苦笑いを浮かべるハクアに、キリヤは少しだけ呆れた。

「じゃあな」

「はい。キリヤさんも、気を付けてくださいね」

「……………」

そんな言葉を背中越しに聞いて数歩歩いたところで、キリヤはもう一度だけ足を止めた。

「……おい」

そして今度は、こっちからハクアの背中に向けて声を投げる。

「はい？」

振り返り、ハクアは聞き返す。そうして向かい合ったまま、少し

だけ空白の時間が流れた。五秒か、十秒か。やがてキリヤは小さく息を吸い込んで、一つだけ言った。

「キリヤでいい」

「……え？」

ハクアは最初、その言葉の意味が良く分からなかった。

「だから……その、さん付けで呼ぶの、やめる。呼び捨てで、いい」

「あ……は、はい！」

どういうわけか、ハクアの返事は元気が良かった。

「じゃあ、私も同じがいいです」

「……あ？」

今度はキリヤが間の抜けた声を出す番だった。

「私のことも呼び捨てでいいですから、できればちゃんと……名前
で呼んで、ほしいです」

「……」

キリヤは少しだけ迷った。こんな風に切り返されるなんて思っていなかったからだ。だから、少しだけ、困った。けれど

「……じゃあな。ハクア」

何とか、背中越しにそう言うことはできた。

「……はい！ またね、キリヤ！」

もう答えるのも億劫になって、キリヤは背中越しに軽く手を振ってその場を離れた。

おかしい。ギルドの皆にも、知り合いのやつらにも、ずっと名前前で呼ばれ続けていたはずなのに、アイツのは……ハクアのは、どこか違うような気がした。

正直、少しだけ照れ臭い……と思う。はっとなって我に返り、キリヤは思った。ここにリノがいたら、一晩中かけてでもいじくり倒

されていたのは間違いない。どうか、ギルドに戻るまでのこの帰り道の上で、少しでも赤くなったこの顔が元に戻ってくれますようにと思いつつ、キリヤの足取りは速かった。

第三話 深夜の宴(1) - すれ違う二人 -

夜の帳が落ちた頃、修道院の中に一つの人影が動いていた。

「お母さん。今日は、色んなことがあったよ」

声の主はハクアだった。教壇の前、薄暗い室内で両膝を折り、両手を祈るように合わせて呟く。明かりは消え、光源と呼べるものはステンドグラス越しの夜空から降り注ぐわずかばかりの月光のみ。その光がハクアの真っ白な修道服をうつすらと染め上げているように、まるで淡い光に包まれているようにも見える。遠目に見てもその姿はとても神秘的に映ったことだろう。

祈りを捧げるようにハクアは言葉を続ける。それは、今はもういない母親に向けての言葉だ。

「……それでね、キリヤが私を助けてくれたんだ。すごいんだよ、キリヤは。私と同じくらいなのに、もう騎士の見習いなんだって。私ももつと、すっかりしないとダメだよね」

そんな風に少しだけ自嘲めいてハクアは笑う。人気のない修道院の中は静寂に包まれていて、そんな微かな小声さえも反響して大きく響いてしまいくらいになる。

この修道院には、ハクア以外にも何人かのシスター達が寝食を共にして生活している。彼女達のが寝泊りするはこの修道院そのものの中ではなく、中庭を通じて造られた小さな寮のような場所だ。もちろんハクアの部屋もその寮の中にあるのだが、ハクアは時々こうして寮を抜け出し、今日一日の出来事や悩み事などを天国の母親に向けて報告していた。

それら全てに等しく、正しい答えが返ってくるわけではない。が、ハクアは特に嬉しいことがあったときはこうして、天国の母親にそのことを届けていた。届かないかもしれない。でも、祈りを捧げることはできる。願いだって、願わなければ叶いはしないのだから。

「よし」

一通りの言葉を天に投げかけて、ハクアは月明かりの下で静かに立ち上がる。夜もだいぶ深まってきていた。春になったとはいえ、夜になれば冬を思わせる肌寒さは今の季節も健在だった。少しだけその寒さに身震いをさせて、ハクアは静かにその場所をあとにする。そのときだった。

「……あ、れ？」

ふと、自分の首の辺りに妙な違和感を覚えた。それは痛みや肌寒さといったものではなく、もっと別のものだ。

「うそ、ない……？」

ハクアは自分の首と胸、その両方を手探りで触れて気付く。

「ペンダント、落としちゃったのかな……」

それはハクアにとつての大切なお守りだった。今は亡き母親と一緒に写った写真が収められた、銀のペンダント。いつも片時も肌身離さず持ち歩いていたはずのそれが、いつの間にかなくなってしまっていた。そんな大事なことに今更気付くなんてとも思うが、振り返ってみれば仕方ないことだろう。

何せ、今日一日は本当に色んなことがあった。一步間違えたらその命を落としてしまったかも知れないのだ。様々な意味で、今日という日は運命の分岐点だったのかもしれない。しかし、それとこれとは話は別だ。

「どう、しよう……。あ、もしかしたら……」

ふとハクアは思った。もしかしたら、キリヤが自分を助けてくれたときにペンダントを拾ってくれているかもしれない。あの怪しい二人組の男達に連れて行かれそうになったときまでは、ペンダントは確かに首から提げていたことは覚えている。それだけは間違いない。

「明日になったら、聞いてみないと」

今日はもう時間が遅い。夜が明けて、明日になったらもう一度キリヤのギルドを訊ね、ペンダントのことも聞いてみることにしよう。と、そこまで考えたときのことだ。

カツン、と。ふいに背後からそんな音が聞こえた。あわてて振り返ると、そこに

「ハクア、ですか？ こんな時間に、一体どうしたのです？」

ランタンの明かりを手に持ったエルザードがそこに立っていた。

「……どうしたんです？ そんなとこに座り込んで」

エルザードは目の前で金魚のように口をパクパクさせて座り込むハクアを見て、不思議そうに訊ねた。

「し、神父様？ お、驚かさないでください……」

半分泣き顔になりながら、しかしハクアはまだ腰を上げることができない。情けない話だが、今の驚きで腰が抜けてしまっているようだ。

「やれやれ。怖がりなのに、こんな真つ暗なところで何をしているかと思えば……」

エルザードはそつと片手を差し伸べ、ハクアの体を引っ張り起す。

「す、すいません……」

「まあ、怪しい真似をしている様子ではないからよしとしましょう。しかし、春になったとはいえ夜の寒さはまだまだ厳しい。こんなところに長居しているのは風邪を引きます。何事もほどほどにね」

「はい。ご心配おかけしました」

「いえ、分かればいいのですよ」

「それじゃ私、そろそろ部屋に戻ります。おやすみなさい、神父様」

「ええ、おやすみなさい……と、そうそう。少しいいですか、ハクア」

歩き出した背中を呼び止め、エルザードが声をかける。

「はい、何でしょう？」

「さつきはエリーナもいたので聞くに聞けなかったのですが……その、あなたを襲った二人組の男についてですが……」

「……はい」

「……いえ、失礼。こんな、わざわざあなたの傷口を抉るようなことは聞くべきではないですね。すいません、失言でした」

「そんな、気にしないでください」

「いえ、いいですよ。ただ、もしあなたが二人組の男の特徴などを覚えているのであれば、周囲に警戒を促すこともできるかもしれないと思ひましてね」

「あ……」

「……覚えている範囲で構いません。何か、特徴はありませんでしたか？ 髪の色や顔つき、身につけていた珍しいものなど、何でもいいのです」

「……すみません。私、すぐに叩かれて気を失っちゃったから……」
「そう、ですか。いえ、そんな顔をしないでください。あなたは何も悪くない。あなたは被害者の立場なのだから」

「……あ、でも、髪型と髪の色は覚えています。片方は茶色で、もう片方は黒でした。髪の長さはどっちの男の人も短く切り揃えて、逆立っている感じで……」

「……ええ」

「……それと……そう、だ。確か、二人揃って二の腕の辺りに……」
記憶が鮮明になって思い出される。そうだ、確かにあの二人組はそれぞれ、まるでトレードマークか何かのように……。

思い出し、それを言葉にして吐き出そうとした、その直前。

「……二の腕の辺りに、真っ赤な布を巻き付けていた……ですか？」

「……え？ あ……そ、そうです。その、真っ赤な布を……」

「…?」

「……そうですか。やはり、そうでしたか」

ランタンの炎の中で、エルザードの表情がわずかに揺れる。

「……神父、様？ あの、どうして……」

「もしかとは思ったのですが、やはりね……」

エルザードの声色が低くなっていく。感情の色が読み取れなくなり、場の空気そのものが異様な質へと変化していくようだ。

「……………っ」

ハクアは聞けない。一番聞きたいその言葉が、喉の手前で引つかかってしまったように出てこない。喉がからからに渴いていた。にもかかわらず、背中には嫌な汗がじつとりとにじみ始めているのが良く分かった。頬を一筋の汗が伝う。一瞬で冷えたそれは、氷のような冷たさを携えて流れ落ちて

「……………っ!」

いくことはなかった。そうなる前に、エルザードの指の腹がその水滴を掬い取ったからだ。冷たい冷たい、人のものとは思えない温度の指先で……。

「……………」

「……神父、様……あ、あの……」

「……ああ、すみません」

温度のない声だった。それはもう、ハクアが知っているエルザードという人間のものとは、全く別の……別の、何か。

「……あの役立たず共が殴り付けた頬は、こちら側でしたか?」

「っ!?!?!」

寒気が吹き飛んだ。そして同時に、ハクアは全てを理解した。理由はそれしか見当たらなかったのだ。本来なら絶対知りえないはず

の事実を、目の前のエルザードが知っている理由。それは、つまり。
「あ、う……………」

そこから先を考えるよりも早く、ハクアは意識を失った。エルザードの手には白い布が握られており、それによって鼻と口を塞がれたハクアは深い眠りへと落ちてしまっていた。

「君にはまだ、役に立ってもらわないといけないのですよ」
温度のない声が、静かに笑った。

「 さあ、間もなく宴の開演だ」

「ねえ、リノ。これ何？」

そう言っただけで差し出された手の中には、見覚えのない銀色のペンダントが握られている。

「それ、どこにあったの？」

聞かれたリノが聞き返すと、彼女は……同じギルドのメンバーでもあるメルフィネは自分のベッドの隙間を指差しながら

「そこに落っこちてたよ」

と答えながら、ペンダントをリノに手渡した。

「ん……………あ、もしかしたら」

しばらく眺めても見覚えのなかったリノだが、ふいに今日の昼間のことを思い出した。

「これ、ハクアちゃんの忘れ物かも？」

「誰よ、そのハクアって？」

「あー、実はちょっと今日の昼間に、色々あってね」

リノが続けて口を開こうとしたところで、部屋の扉が二回ほど軽くノックされた。

「どうぞぞー」

ベッドに腰掛けたままのメルフィネが答えると、ドアノブが廻っ

て一人の男が入ってきた。

「おい、晩飯の準備できたつてよ。もう皆揃ってるから、お前らも早く降りてこいよ」

「やつほう！ 待ち詫びた！」

晩飯と聞くや否や、メルフィネは勢いよく部屋を飛び出していく。

「お、おい。階段から転がり落ちても知らんぞ！」

「大丈夫大丈夫！ そんなことより、早くしないとアンタの分も食べちゃうからな、ユーグ！」

「ば……おい待てふざけんな！ こっちはお前以上に腹ペコだつっの！」

メルフィネの背中を追いかけてユーグもどたばたと階段を駆け下りていく。

「リノ！ お前も早くこいよ！」

「あ、うん」

とりあえず手の中のペンダントをポケットの中にしまい、リノも一階の食堂へと急いだ。

「うまいおいしいおいしいうまいうまいうまい！」

「ちよつとメル、食べるか喋るかどつちかにしなさいって」

「ふあぐ、ふあふいんふいぐふあふあ、ふあぐふあぐむほ！」

「どこの国の言葉だそれは……」

ひたすらに食べ続けるメルフィネ、注意を促すリノ、そしてとりあえず突っ込んでおくアクセル。

「いやー、いつ見てもメルフィネの食べっぷりは、見てるこっちが食欲をなくすくらいすごいよね」

「そんだけ食ってるのに、どうして同じ体型を維持できるんだ？」

「……飯くらい静かに食べよな」

なんだか言葉が矛盾しているアルフレッド、素朴な疑問を口にするユーグ、呆れるキリヤ。

こうして今日も騒がしく始まった食卓に、ギルド【雨宿り】のメ

ンバーは揃っていた。

メルフィネはギルドの中で最年長の女性で、主に土木関係の仕事で生計を立てている。女性で土木関係なんて似合いそうにない感じがするかもしれないが、本人いわく賃金が高く、体を鍛えるにもちょうどいいから割に合っているとのことだ。こう見えてちょっと有名な格闘技マニアだったりする。ちなみに彼女のことをメルと呼ぶのは、ギルドの中ではリノだけである。

アルフレッドは狩で生計を立てる、いわゆるハンターだ。街の近くの森を主な縄張りとしていて、そこで獣や野草を調達し、市場で売って生計を立てている。単独で行動することもあれば、ハンター仲間と組んで大掛かりな狩を行うことも少なくない。見た目はのんびりしているが、頭の回転が速い。自分の名前が長いので、ギルドメンバーや仲間内にはアルと呼ぶように頼み、これで通じている。

ユーグは工匠、いわゆる鍛冶屋だ。鍛冶屋と一口に言っても単純に武器を作ったりするだけではなく、修理なども請け負っている。場合によっては自分の足で炭鉱や洞窟に入り込み、市場にあまり出回っていないレアな鉱物などを採取したりもする。商売人としても顔が広く、街の中の商人達にはかなり顔が利く。メルフィネと同じくギルドの中では最年長者で、頼れる兄貴分と言ったところだろうか。

そんなこんなで夕食の時間はあっという間に過ぎていく。男性陣はテーブルの後片付けを、女性陣は洗い場で食器類を洗っている。

「あ、そうだ」

と、洗い物を終えたばかりのリノが思い出したように言った。

「キリヤ、これ」

言いながら手渡されたのは、先ほどメルフィネのベッドの横に落

ちていた銀色のペンダントだ。

「何だよこれ？」

「多分、ハクアちゃんの忘れ物だと思うのよね」

「それで？」

「それ、ハクアちゃんに渡しといて」

「……何で俺が？」

「ぶつくさ言わないの。送り届けてあげた仲でしょ？」

「っ、それとこれとは関係」

ないだろうと言うよりも早く、並んで洗い物をしていたメルフィンが食いついた。

「何！？ 送り迎えの仲！？ なんだよキリヤ、お前も隅に置けないな。もうそんないい子を見つけたのか！？」

まず、その言葉に食後のコーヒートを口にしていたユーグが盛大に吹いた。もちろん、コーヒーごと。

「お、おま……まさか、もう手を出したんじゃないだろうな！？」

「ば……な、何だよ手を出すって！ 無理矢理そっち方面に話を結び付けようとすんな、バカユーグ！」

「いやあ、もしかしてキリヤにもモテ期到来？ まあ、目つきはちよつと悪いけど、黙ってればなかなかの色男だしねえ」

十代も半ばの少年に対して色男はどうかと思うが、ほとんど悪乗り要領でアルフレッドが続けた。

「目つきが悪いのは生まれつきだ！ 余計なお世話なんだよ！」

そんなやりとりをアクセルだけはやれやれといった感じで眺めている。週に何度かはこんな状態になるので、もはや慣れてしまっているのだろう。

「はいはい。まあそれはそれとして」

洗った食器を一通り拭き終えてリノが続ける。

「明日でいいから、時間見つけて返してきてあげてよ」

「だから、何で俺が。リノが行けばいいだろ」

「私は明日予定があるの。他の皆だってそれぞれに仕事があるんだから、この中で時間に都合が付くのはキリヤくらいでしょ？」

「ぐ……」

悔しいがその通りだった。騎士の見習いにはなったものの、そんなにすぐに騎士としての任務がやってくるわけではない。ほとんどの場合が緊急時に備えての待機命令と似たようなものだ。

「……分かったよ」

リノからペンダントを受け取ると、キリヤはすぐにそのまま玄関へと向かった。

「ちよつとちよつと、どこ行く気なの？」

「ま、まさか……」

メルフィネが割と大真面目な様子で真剣に聞く。

「よ、夜這いか!？」

その爆弾発言に再びコーヒーを噴出すユージュ。今度は鼻からも得体の知れない液体と一緒に噴出していった。

「ああもつ！好きなだけ勝手に騒いでろ！」

ボタンと勢いよく扉を開け放つと、キリヤはそのまま夜の街に向かって走り出した。

「良かったの、行かせて？」

見届けてからアルフレッドがアクセルに訊ねた。

「いいさ。何だかんだであいつも、少しでも早くあの子を安心させてやりたいんだろう」

そう言い切ったアクセルの顔は、どこか満足気だった。

夜はまだ深まっていない。行って忘れ物を渡すくらいなら、特に問題はないだろう。

第四話 深夜の宴(2) - 消えた少女 -

時間もすっかり遅くなってしまったせいか、修道院の正門は閉まっていた。が、鍵まではかかっていないようで、無用心だなとは思いつつもキリヤは敷地の中へと足を踏み入れる。

建物の明かりはすっかり落ちていた。昼間はどことなく荘厳な雰囲気をかもし出す修道院だが、こうして辺りが暗くなってから改めて見直してみると、少なからず不気味な感じがしてしまうのは気のせいか。

「……さすがに、時間が遅かったか」

何度か玄関の扉をノックしてみたが、内側からは何の反応も返ってはいなかった。無駄足を踏んでしまった感は否めないが、さてどうしたものだろうか。

と、少し辺りを見て廻ってキリヤは気が付いた。建物の裏へ続く方に整備された道がある。暗がりではあるが、そこだけが月明かりに照らされてはつきりと見えたのだ。キリヤはそちらの方に歩を進めていく。

道なりに真っ直ぐ行くと、そこに修道院とは別の木造の建物が見えてきた。建物のあちこちには明かりがついており、中には人がいることを示している。

ここは修道院に所属するシスター達が寝食を共にしている寮だ。そのことを知る由もないキリヤだが、修道院に誰もいない以上こちらを訊ねる他ない。

建物の正面のドアを何度かノックする。最初の数回はまるで反応がなかったが、明かりがついている以上は中に誰かしら人がいるのは間違いないはずだ。

何度目かのノックの後、内側からぱたぱたという足音のようなものが聞こえてきた。それを聞き取り、キリヤは玄関から一歩下がる。

「はいはい。こんな遅くにどちら様？」

と、内側からはそんな女性の声が聞こえてきた。キリヤにも聞き覚えのあるその声の主は

「あら？ あなたは確か、昼間の……」

昼間に顔を合わせた、シスターのエレーナだった。

「夜遅くにすまない。迷惑だとは思ってたんだが……」

そこまで言いかけて、キリヤは一度口ごもる。まさか、ギルドの連中にかかわられてこんな夜更けに出向く羽目になったなどと、そんなことはとてもじゃないが口が裂けても言えやしない。

「キリヤさん、だったかしら。間違ってたらごめんなさいね」

「いや、それで合ってるよ」

「ところで、こんな夜遅くにどうしたの？ 何か用事でも？」

「いや、用事ってほどのものでもないんだけど……」

やや口ごもるキリヤを見て、エリーナはしばらく怪訝そうな顔をしていた。が、心当たりが思いつくや否や、わずかに……というか、人をからかうような子悪魔じみた笑顔に表情を変え、にやにやと笑いながら聞いてきた。

「もしかして……ハクアに用事があったのかしら？」

「っ！？」

まんまと胸のうちを言い当てられ、キリヤは反射的に視線を逸らす。しかしこの状況では、それはただの火に油を注ぐ行為に他ならない。エリーナはなるほどなるほどと自分勝手に頷き、そして自分勝手ににやけていた。

「そ、そんなんじゃない！ 俺はただ、あいつに忘れ物かもしれな
いのを届けにきただけだ！」

「あら？ あらあら？ あらあらあら？ そんなんじゃないって、
どんなにかしら？ 私、まだ何も言っていないのだけど？」

「……………っ！……」

完全にからかわれている。話すだけ時間の無駄な気もしたので、キリヤは早々に要件だけ済ませてしまおうと心に決めた。

「と、とにかく！ ほら、これ」

ポケットの中から預かった銀のペンダントを取り出し、エリーナの鼻先に突きつける。

「あら？ これは確か……」

「……やっぱ、あいつのか？」

「ええ、そうね。間違いないわ。でも……」

「……いえ、何でもないわ。そうよね、あれだけ怖い目に遭っていたら、その一瞬くらいは忘れてしまっても仕方ないわね……」

「何のことだ？」

独り言のように語り出すエリーナに思わずキリヤは聞いた。

「ああ、ごめんなさい。こっちの話よ、気にしないで」

が、エリーナは次の瞬間にはいつもどおりの表情に戻っていた。

「さあ、入って。夜の風は寒いでしょ？」

「いや、俺はいい。あとはあんたが、あいつにこれを届けてくれればそれで」

そこまで言いかけて、キリヤはエリーナに半ば強引に襟首を掴まれて中へと引きずり込まれた。

「な、何すんだ！？」

ボタンと、しかし背後ではしつかりと玄関の扉が閉まる音がする。

「おい、用件はもう済んだんだ。俺は」

もう帰ると言い切るより早く、今度はエリーナが銀のペンダントをキリヤの鼻先に突きつけていた。

「迷惑ついでに、もう一つ頼まれてくれない？」

「……っ？」

「このペンダント、あなたの手であの子に渡してあげてほしいの」「何で俺が、そんなこと」

「お願い」

「っ……」

別に睨まれたわけでも、すこまれたわけでも、脅されたわけでもない。ただ、エリーナの目はとても真剣な表情をしていた。無視して視線を逸らすことはいくらでもできたが、キリヤは正面からその目を真っ直ぐに見返した。悪ふざけやその延長で人にものを頼むような目ではなかった。それだけは、はっきりと分かった。

「……分かったよ。ったく、どいつもこいつも……」

立ち上がり、キリヤはしぶしぶとだがペンダントを受け取る。

「ありがとう」

そう言って、エリーナは小さく微笑んだ。

「きつと、ハクアもその方が喜ぶと思うのよね」

「……」

その根拠はどこから来るんだろうと、キリヤは思ったが口には出さなかった。どうせ答えが返ってこないことなんて、分かりきっていたから。

「ハクア、ちょっといいかしら？」

エリーナが部屋のドアをノックしながら声をかける。

寮の一階の奥の部屋。そこがハクアが寝泊りをしている一室だ。

キリヤは今更になって引き受けたことを後悔し始めていた。廊下で何人かのシスターとすれ違ったときもそうだが、自分という存在がひどく場違いだということは良く分かった。ひそひそと背中越しに囁かれている会話の内容も何となく予想はつく。つくが、こつちから火の中に飛び込む必要もないのでとりあえず聞き流しておいた。とまあ、それはさておき。

「……おかしいわね。もう寝てしまったのかしら？」

「寝ているなら、無理に起こさなくていい。やっぱりあんたが手渡

すか、どうしてもダメだつてんなら、明日また出直すよ」

「……ちよつと待ってね」

エリーナはドアノブに手をかけ、ひねってみる。鍵はかかっていなかった。それを確認すると、エリーナは

「ハクア、入るわよ？」

それだけ言つて、扉を静かに押し開けた。

部屋の中は真つ暗だった。窓は閉まっているが、思わず身震いするほどの肌寒さを覚える。

「……ハクア？ いないの？」

その問いに対しても返事はない。暗闇の中、エリーナは手探りで部屋の中へと入っていく。

「おい、いいのか勝手に入って……」

「待っていて。今、明かりをつけるから……」

おそらくは寮の部屋の間取りはどれも同じで、ベッドなどの家具の配置も固定なのだろう。まるで自分の部屋のようにエリーナは暗闇の中を進み、テーブルがあるであろうその場所で火の灯っていないランプを手にする。

その後ポケットの中からマッチを取り出すと、それを擦って火を起こす。それをランプの中の油がしみた紙に付けると、部屋の中がようやく明るさに包まれた。だが、そこには

「ハクア……？」

「……いない、のか？」

部屋の中にハクアの姿はなかった。

そう広くない部屋を隅々まで見渡すが、やはりその姿を確認することはできなかった。

「どうしたのかしら……」

「……風呂とか、トイレじゃないのか？」

もっともらしい可能性を提示するキリヤだが、これにはエリーナ

が首を横に振る。

「入浴はもう済ませたはずだし、お手洗いはさっきまで私が使っていたけど姿は見ていないわ」

「じゃあ、どこに行っただっていうんだよ。こんな時間に出歩いているのか？」

キリヤが言ったところであまり説得力はないのだが、確かにもう夜もだいぶ深まっている。少なくとも、安心して大手を振って歩いてられる時間帯ではない。

「分からない。分からないけど……」

言いかけて、エリーナはキリヤの目から見てもはつきり分かるくらいに身震いした。それは多分、夜の寒さのせいではない。

「……嫌な、予感がするの。あの子に、何かあったんじゃないかって、そんな……」

「……………」

「……修道院を探してみるわ。あの子、時々だけど部屋を抜け出してあそこにいることがあるみたいだったから」

「……俺も行く」

キリヤの言葉に、エリーナは一つ頷いて答えた。その顔色は、すでにうつすらと青ざめ始めている。

「……ハクア？ いるの？ いたら返事をして……」

修道院の中へ入ったキリヤとエリーナは、ランタンの明かりを頼りに内部を探し始めた。当たり前だが人の声も気配もしない。それはついさっき、玄関扉をノックして反応がなかったことを知っているキリヤには当然のことだった。

静謐とした空間は、それだけで時折耳鳴りにも似たおかしな音を耳へと運んでくる。それらを全て無視して、キリヤとエリーナはそれぞれランタンを手に中を歩き始める。

「……………」
しかし、当然のように人影などはあるはずもない。声も気配も感じなければ、別の光源も見当たらない。それでも必死になって探ししてしまうのは、ここにいてほしいという願望からなのだろうか。

逆に言えば、ここにいなければ一体どこへ行ってしまったというのか。少なくとも、エリーナには見当も付かない。そしてそれは、キリヤにとっても全く同じことだった。

「……………あのバカ、どこをほっつき歩いて」

いるんだと口に出そうとしたとき、キリヤのその足が何かを蹴った。床に躓きそうになったわけではない。そもそも段差などはないし、歩いているのは赤い絨毯の上だ。転びそうになる理由はまるで見当たらない。と、いうことは……………。

「……………」

つま先にぶつかって多少なりに蹴飛ばしてしまったそれを、キリヤはランタンの火で追いかける。赤い絨毯の床が真っ直ぐに続き、左右には長椅子が整列している。ただ、それだけ。それだけが続いている闇の中に、しかしそれは……………。

「……………？」

それは

「……………っ！？」

確かに、あった。

カタンと音がした。それは、ほぼ同時にそれを見つけたエリーナが、手にしていたランタンを長椅子の上に置いた音だった。

「……………うそ……………何、で……………？ どう、して……………これが、ここに……………？」

その顔色は青を通り越して黒に染まり始めている。信じられないという表情。あつてはならない光景を目の当たりにした者の表情。

「ハク、ア……………」

声にならない声で、エリーナがそれでもどうにか搾り出す。こころにもいかなかった、少女の名を呼ぶ。

そこに、片方だけの靴が脱ぎ捨てられていた。

それが誰の物なのか。聞かなくても、もう十分すぎるほどに理解できていた。

「……………ハクア……………ッ！」

不思議と、握る手に力が込められていた。その理由は、今はまだ、よくは分からない。

第五話 深夜の宴(3) - 魔笛が告げる25時 -

深夜の港に人影なんてあるはずはない……のだが、どうやら今夜だけは事情が違うようだ。

「おお、いるいる。金だけは持ってそんな貴族や遊び人がわんさかだ」

物陰からそう言ったのは、その場には不釣り合いすぎるほどの巨大な鎚を背負ったユーグだ。

「ほんと、金つてのはあるところにはあるもんだね。国境の辺りの貧民街じゃ、毎日五人は人が飢えて死んでいつてるって話もあるくらいなのに」

続けて口を開いたのは、近くの大木の枝に腰をかけたアルフレッドだ。辺りを暗闇一色が支配する夜の中でも、ハンターであるアルフレッドの夜目は正常に機能していた。

「ざっと見て、百五十人つてとこかな。ま、こっだけ溢れてれば逆にそう簡単には見つかったりしないだろうから、かえって安心かもね」

「だといいたがな……」

アルフレッドの言葉に素直には頷かず、ユーグは遠巻きに人ごみの様子を食い入るように眺める。あの中に今、アクセルとキリヤが紛れ込んでいる。

「ま、今は無事を祈ろうよ。大丈夫、アクセルが一緒なら、滅多なことにはならないさ」

「そう、だな……」

ユーグは今度こそ頷き、静かに視線を戻そうとして

「……………アル」

「……………はあ。やっぱり、こうなるのか」

背後から近づいてくるいくつかの気配に、二人はほぼ同時に気付

いた。

「よお。こんな夜中に散歩かい、兄さん達？」

声の主は男のものだった。数は五人、全員が似たような服装に身を包み、共通点はその二の腕の辺りに暗闇でも目立つくらい真っ赤な布が巻きつけられている。それは、数刻前にアクセルから聞かされたある男達の特徴と一致した。

「おいおい、黙ってたんじゃないからねえよ。何か返事したらどうなんだ？ ああ？」

「よせよ。こいつ、ビビって固まっちゃまってんじゃねえの？」

そこでお決まりのような下衆笑いが響いた。男達はそれぞれ顔つきも声色も何から何まで違ってはいたが、品のない笑い声と腐った道の上を歩いてきた時間だけは同じようだった。

「……なるほどな。こりゃ、キリヤがキレルのも頷ける」

「同感」

ユーグとアルフレッドのそれだけのやり取りに、男達は示し合わせたかのようにぴたりと笑うことをやめた。こういう部分だけ無駄に統率が取れているというか、何と言うか……。

「お前ら、何普通に会話しちまってるわけ？」

「テメエの置かれた状況、まだ分かんねえのかよ？」

「あんまり調子乗ってるよ、このまま海の藻屑にして」

そこまで言ったところで男の声が止んだ。代わりに聞こえてきたのは

「ぎ、つやああああああああああつ！？」

相変わらず品性の欠片も感じさせない、耳障りな断末魔だけだった。見れば、男の右足の大腿部を一本の銀の矢が貫いていた。傷口からはどんだん血が溢れ出し、男は絶叫と共に傷口を抑えながらバカみたいに地面を転がっている。

「て、テメエ！」

「こんなことして、タダで済むと思ってるのかあ!？」

残りのバカ共が口々に喚ぐが、とりあえずアルフレッドは無視した。代わりに、二の矢三の矢と立て続きに弓を引き、二人目の右肩と三人目の左足を潰した。追加で二人分の絶叫が響き渡るが、これについても同じように無視する。

「おたくらがこっちの事情を知ったこっちじゃないようにさ、こっちもおたくらの事情や、ましてや素性なんてどうだっていいんだよね」
淡々と、しかし確かな怒りの色でアルフレッドは告げる。

「別に興味なんてないし、正義の味方として僕達は動いているわけじゃない。けどね」

一度言葉を区切り、アルフレッドは残った五体満足の男をそれぞれに睨みつける。すでに三人の仲間がやられていることもあってか、残された二人の男はわずかに身を引く。それさえも無視して、アルフレッドは続けた。

今、こうして自分がここにいる理由。意地っ張りで素直じゃない、負けず嫌いで口が悪い少年から受けた、たった一つの言葉を。その言葉を思い出して、はっきりと告げる。

「あいつをあれだけ怒らせたんだ。それ相当の痛みは、お前達にも味わってもらおう」

確かな敵意を含んだその眼光だけで、すでに傷を負った三人が地面を這いずるようになって後退した。

「無駄なことはしないほうがいいよ」

その言葉を合図にしたかのように、今の今まで一言も発さなかったユーグが静かに動いた。その手には、巨大なハンマーのような鈍器が握られている。素人目に見ても重量は軽く百キロは超すであろうそれを、しかしユーグは片手だけで軽々と持ち上げていた。

「彼は、僕ほど優しくはないから」

アルフレッドのその言葉が止めになった。

「ひ……や、やめる！ やめてくれええええつ！」
一人がそう叫ぶと、あとはもう芋づる式だった。ただ一つ、運がなかったのは

「そうやって助けを求めた人達を、お前たちがどうしてきたか。その身で知ることだな」

目の前にいる鈍器を手にした男は、悪党の都合のいい命乞いをやすやすと受け入れるような、甘い人間ではなかったということだ。
直後に、ドゴンガゴンと鈍い音が港の隅で響き渡った。

事態が動き出したのは、今から少し前のことだ。

まず、キリヤが息を切らしてギルドに戻ってきた。ちょうどそのとき、アクセルの元に緊急の知らせが騎士団経由で届いたところだった。その内容は、最近頻発している人売りの組織的な繋がりが見えてきたというものだ。どうやら連中は、攫った人々をすぐに他の街などに移送するわけではなく、一定期間街のどこかで匿い、ある程度の人数が集まったところでまとめて移送をしているらしい。なかなか手がかりを掴めなかったのには、こういう動きも関係していたようだ。

そして一番驚くべきことは、巡回中の騎士団員の何人かが港に停泊している不振な大型船を確認したというものだった。街の港に船が来る日は決まっている。そして今日は、その予定の日ではない。だとしたら、今そこに停泊している船は、一体何を運んでやってきたのか？あるいは、一体何を運ぶためにやってきたのか？

よじれた糸を正しく解くのに時間はかからなかった。その船こそが、攫われた人達を出荷するための道具に間違いない。

そこまで至ったアクセルの取った行動は速やかだった。すぐに騎

士団の内部に緊急の通達がされ、精鋭を含んだ少数の部隊が編成される。キリヤは半ば無理矢理、この任務に参加することになった。もちろんアクセルは参加を認めようとはしなかった。が、最後にはキリヤに根負けし、常に行動を共にするという条件付きで参加を認めた。

そして今、二人を含めた騎士団の部隊は船内にいた。部隊といっても、総勢はおよそ十二人の小隊だ。大人数では他の乗客に紛れるのも難しいし、何より目立つ。相手は仮にも犯罪組織だ。その規模がどの程度のものかまでは把握し切れていないが、目立たないに越したことはない。

アクセル達を含む部隊のメンバーはそれぞれ二人一組に別れ、別行動で船内の様子を探り始める。

「……こいつら、全員船の客なのか？」

船内を歩きながら、キリヤはその乗客の多さに驚く。

「おそらくだが、ここの乗客のほとんどは別の都市を経由してここまで来たんだらう。船の乗客としてではなく、人を買ったための客としてな」

「っ……！」

キリヤは苛立ちを隠せなかった。それはというのも、乗客の誰も彼もが実に楽しそうに……普段の日常と何一つ変わらない様子で世間話を楽しんでいたからだ。これからこの船のどこかで、罪もない人が売り物として競に出されるといってもかかわらず、だ。

「くそつたれ……どいつもこいつも、何とも思わないのかよ……！」
「少しでもまともな神経をしている人間なら、こんな場所にはいないだろうさ。ここにいる客達は全部、普通に金で得ることのできる満足や快樂にはとっくに飽きているんだ。だからこういう、表の世界ではお目にかかれない餌に食いつく。自分の中の欲求を満たした

いという、ただそれだけのためにな」

「……こんな、こんな……やつらに……」

キリヤは強く奥歯を噛み締めた。あいつが……ハクアが何をしたというのか。こんな所にまで墮とされてしまうようなことをしたというのか。

「あんな……あんな、ヤツが……」

ちよつと助けられたくらいで、人をヒーロー扱いしてしまうようなな。

「あいつが……」

名前を呼んでもらえたくらいで、バカみたいに喜んでしまうような。

「……ハクアが」

こつちの背中が見えなくなるくらいまで、ずっとその場で手を振り続けているような。

「……何を、したっていうんだよ……！」

立ち止まり、口に出さずにはいらなかった。あまりにも理不尽な目の前の現実。その理不尽が平然と見て見ぬふりをされている世界。そして何よりも、その世界の中で何も知らずにいた自分自身に、どうしようもなく腹が立つ。

「その怒りは取っておけ」

一歩前に行くアクセルが、振り返らずに背中越しに言う。

「まずはハクアを含め、運ばれた人達を助けるのが先決だ。後のことはそれから考える」

「……分かった」

キリヤは頷く。不本意ではあるが、それしか方法がないのも悔しいが事実だ。まずは、できることからやっていくしかない。

と、その時。

「……ん？」

「どうした？」

不意に立ち止まったキリヤに対し、アクセルが聞く。

「……今の、確か……」

キリヤは人ごみの向こうを眺めている。ここは船内の中でも特に広く造られた大広間で、客の数も特に多い。あちこちに白いテーブルクロスを広げた丸テーブルが置かれ、その上には料理や酒が所狭しと並べられていた。

が、そんなものはこの際どうでもいい。キリヤが今しがた、その目に見たのは

「……エルザード？」

昼間に知り合った修道院の神父の名を、キリヤは呟いていた。

「エルザード？ 誰だ、それは？」

「……………」

キリヤは答えない。今でも視線は人ごみの向こう側を見据えていて、自分が見たその人影が果たして現実のものなのか、それともただの気のせいだったのかを必死になって思い返している。

灰色の髪。一回り大きな背丈。縁のない眼鏡。そして何より、首から提げた銀の十字架。

「見間違いなんかじゃない……………！」

言うや否や、キリヤは人ごみの中を掻き分けて一目散に走り出す。「お、おい！ 待てキリヤ！ 待つんだ！」

静止するアクセルの言葉も無視し、キリヤは人ごみの中を走る。頭の中がごちゃごちゃになっていた。聞きたいことが、知らせなくてはいけないことがあった。

しかし、それよりも何よりも、まずは。

「……何であんたが、こんな所にいるんだよ！」

そんなキリヤの思いを嘲笑うかのようにして、その時船の汽笛が船内にまで鳴り響いた。その音はまるで、奈落の底へ続く魔笛のよ

うな音色だった。

時刻は、日付が変わって二十五時。もう間もなく、この船は出港する。自分が考えてる以上に物語が悪い方向に流れ始めていたことに、キリヤはようやく気付き始めていた。

第六話 深夜の宴(4) - 赦されざる者 -

見失った。ともかくにも、船内の乗客があまりにも多すぎる。

「くそ、どこに……」

周囲を睨むように見渡すが、その中に先ほど見えたエルザードの姿はない。それどころか、この人ごみの中でアクセルともすっぴりはぐれてしまっていた。潜入捜査である手前、大声で名前を呼び合うわけにもいかない。

こうなったら、一人でやれるとこまでやるしかない。ひとまずはこの人ごみから離れるべく、キリヤは人と人の間を縫うように動いた。自分がどっちの方向に向かって進んでいるかなんてもはや分からなくなっていたが、それでもただ手をこまねいたまま、足を止めているよりはましだった。

くらげだらけの海を泳ぎ切るようにして、キリヤはようやく人の波から抜け出す。すると、そこはちょうど船の階段のある場所だった。

キリヤが今いるフロアは、甲板のある場所を地上一階とした場合の地下一階に当たる。目の前の階段はそれぞれ上下へと別れ、それぞれ上に向かえば甲板に繋がるラウンジへ、下に行けば機関室などのいわゆる関係者以外立入禁止の区域へと繋がっている。どちらがきな臭いかと聞かれれば、迷わず後者だった。

「……………」

船底へと通じる階段の手すりにつかまって、キリヤは静かに息をのむ。人々の喧騒の中ではあったが、静かに聞き耳を立てるようにすると階段の下の方へ向かう微かな足音のようなものを聞き取ることができた。それがエルザードのものであるという保障はどこにもない。というより、そうであってほしくないというのが正直な気持ちでもあった。

だが、どちらにせよこの状況では他に何も手がかりとなるものはない。ない以上、目に見える範囲で先に進むしかない。その先にあるであろう現実が、自分の望んでいないものであったとしても。

「待ってる」

誰に言うわけでもなくそう告げると、キリヤは下へ続く階段を下り始めた。

カンカんと、靴底が金属の板を叩く音だけがこだまする。ずいぶんと下りてきたようにも思えるし、そうでないような感じもする。船底に近づくとつれて船全体の照明の数も減っていき、文字通り暗がりの中を手探りで進むような状況になってしまった。

先ほどまで聞こえていたわずかな足音も、今はすっかり聞こえなくなってしまうた。代わりに耳の奥に届くのは、静か過ぎる空気が周囲の金属と擦れて共鳴でもしているかのような耳鳴りだった。

空気も冷え、見えない氷の服を肌の上から直接身につけているような感覚。それが寒気なのか、それとも怖気なのかは分からない。分からないが、前へ進むしかない。

やがて、長く短かった階段が終わる。そこに

「……扉？」

金属製の、見るからに頑丈で分厚そうな扉が姿を現した。

道はそこで途絶えており、つまるところ先の足音の主もこの扉の向こうへと入っていったことを示している。

細心の注意を払って、キリヤはその鉄のノブに手をかけ、静かにひねった。鍵はかかっている。そのまま静かに扉を押し開けていく。一気には開けず、少しずつ、少しずつだ。

どうにか人一人が入り込めそうなだけの隙間を確保すると、キリヤはその隙間から滑り込むようにして部屋の中に入る。そして同じような動作で音を立てないように静かに扉を閉め、改めて正面向き直った。

が、そこは暗闇の中だった。何も見えないというわけではないが、暗さに目が慣れるまでしばらくは時間がかかりそうだ。

ここが倉庫なのか機関室なのかは分からないが、闇の中で目を細めてみるとあちこちに四角形の箱のようなものの輪郭がぼんやりと浮かび上がってくる。そつとそれの一つに触れてみると、それはどうやら金属の箱か何かのようだった。触れた指先からは思わず身震いしそうな金属特有の冷たさが伝わってくる。そんな箱のようなものが、どうやら部屋の中いっぱい敷き詰められているようだった。

そうこうしているうちに少しずつ目が暗闇に慣れ、数メートル先の輪郭までぼんやりと浮かび上がるようになったところで

「……っ!？」

カチンという音と共に、部屋の中がいつせいに明るさを帯びた。誰かが電源を入れたのだろう、部屋の中の照明がいつせいに点り、暗闇の中にいたキリヤの目を潰すかのように光が注ぐ。

「く、そ……っ!」

ふいの光源ではあったが、しばらくして目も明るさに慣れてきた。何度かの瞬きを終えて、キリヤはすぐにその場で動かずに身構えた。理由は簡単だ。この部屋には、自分以外の誰かがいるのが明らかに なったからだ。

しかし、部屋全体が明るさに包まれてもその誰かが姿を現す様子はなかった。だが、姿を見せていないだけでその誰かは確実にこの部屋の中にいる。キリヤはその気配を全身でひしひしと感じ取っていた。だから、あえて口に出す。

「……いるんだろ、出てこいよ。こそこそと隠れる理由があるのか？」

金属だらけの部屋の中、決して大声ではないその言葉が四方の壁や天井、床に反射して共鳴する。

そして、そのこだまが鳴り止んだ頃

「おや、誰かと思えば……これは意外な客人ですね」

その誰かは、ようやく四角い鉄の箱の陰から姿を現した。カツンカツンと足音が響く。床の上に影が伸びて、シルエットが浮き彫りになっていく。そして、ようやく姿を現したのは……。

「キリヤさん、でしたか？ いやはや、一体どうしてあなたのような方がこんなところに？」

「……………どういうことだ。説明してもらうぞ。何であんたが、ここにいる？」

「おかしいですね。招待状を持たない者は、乗船の際に厳しく確認しているはずなのですが……………」

「聞いているのはこつちだ！ 何で……………何でお前がここにいるんだ！

答える……………答えるよ！」

一度だけ奥歯を強く強く噛み締め、キリヤは怒鳴るように叫んだ。目の前の現実の、あまりの理不尽さに吼えた。

「 答える！ エルザード……！」

そこに立っているのは、紛れもなく修道院の神父であるエルザードだった。本人はまるで隠す気もないようで、衣装は夕方に出遭ったときと全く同じままの修道服だった。

ただし、その体を包んでいる空気が明らかに変化していた。虫一匹殺さないような聖人の顔をしていて、しかしその縁のない眼鏡の奥にある眼光は比べ物にならないほど鋭く、冷徹さを帯びているように見える。

エルザードはキリヤの荒げた声など意にも介さず、それどころか余裕さえ思わせる笑みの中で軽く眼鏡を押し上げた。それだけの動作だったが、今のキリヤを煽り立てるには十分だった。

「何でお前が……………ここにいる。あいつは、ハクアはどうした。数時間前から、姿が見えない」

両手の拳をはちきれんばかりに握り締め、キリヤは聞いた。だが、

その問いはすでに矛盾している。目の前のエルザードがハクアの失踪と無関係であるのならば、そもそもこんな問いを投げかける必要さえない。

だからそれは、否定してほしかった問いかけだ。知らない、分からないと答えてくれればまだ救われる。だが、もう遅い。投げかけた問いに、答えは簡単に返ってきた。

「そうですか。それはご迷惑をおかけしたようで、どうもすみません。ですが、心配は無用ですよ」

変わらぬ笑みを携えたまま、迷いなく答えるエルザード。それだけで大体の事情は飲み込めた。もっとも、分かっても理解なんてしなくもなかったが。

「ハクアのことなら大丈夫です」

「……何がだ」
聞き返すな。

「何の問題もないと、そう言っているのですよ」

「だから、何がだ……!!」

その言葉を引き出すな。

心では確かにブレーキをかけているのに、現実には正反対だった。エルザードの口から出る言葉の一つ一つが、確実にキリヤの冷静さを削り取っていく。握り締めた拳も、噛み締めた奥歯も、もう限界だ。そして、引き鉄となる言葉が響く。

「……だって、ほら。彼女はこうして………」
「………」
ここにいますから」

言っ、エルザードは自分の隣を指差した。今のキリヤの立ち位置からは、エルザードが指差した方向には鉄の箱が視界を遮っているせいで何も見えない。

「………」

無言のままキリヤは歩く。足が鉛のように重い。鉄球の付いた足枷を引きずっているかのよう。

視界が開けていく。視界が開けていく。視界が開けていく。視界が開けていく。視界が開けていく。そこに

「……………っ！！！」

探していた少女が、確かにいた。

鉄の十字架に両腕を縛り付けられ、全身のあちこちに真新しい生傷と血の跡を刻んで座り込むハクアの姿が。

「ハ、ク……ア……？」

それはまるで、古い時代に行われた魔女狩のような光景だった。縛られた両腕はだらりと力なく垂れ、指先からは血の色が失せかけている。膝を折ったまま、両足はだらしなく投げ出されていた。白い衣服はあちこちが破れ、この鉄だらけの冷たい空間の中で肌が露出していた。何かで打ち付けられたような痣や、今なお血が止まらずに流れ続ける傷口さえある。

見ているこっちが痛くなってしまうほどの、むごたらしい仕打ち。これが、人のやることなのか。同じ赤い血が流れている、人間のすることなのか。

「ほら、彼女はここにいますでしょう？」

その声は、先ほどまでと何一つ変わらない声色だった。

「だから言ったじゃないですか。何の心配も要らないと、ね」

エルザードは心の底から微笑んでいた。何一つとして問題は起こっていないと言い切った。その言葉がキリヤの耳に届いていたかどうかは分からない。狂いそうになった時間の歯車の中で、それでもキリヤの耳が微かに捉えていたものは

「……………い。わた……………いで……………」

霞んでゆくような言葉。こんなぼろぼろの体になってまで、彼女は……ハクアは謝っていた。いや、それは謝罪ではない。ハクアはただ、自分自身を責め続けていた。何もできない自分を。何かを変えただけの力のない自分を、ただ悔やんでいた。

うわごとのように、ハクアはその言葉を繰り返す。誰のためでもなく、自分のためでもなく。贖いを求め続ける、羽の折れた天使のように。

「ごめん、なさい……私の、せいで……」

瞬間、キリヤの中で何かが音を立てて切れた。頭が妙に冷える感覚。怒りを怒りのまま冷凍保存したかのよう。

「……………ねえ」

「はい？ 何でしょうか？」

小声すぎて聞き取れなかったその言葉に、エルザードは微笑みを崩さずに聞き返した。そして

「っ！？」

次の瞬間、エルザードは鉄の床の上を何度も転がっていた。

「が、は……………っ！」

置かれていた鉄の箱に体を打ちつけ、ようやくその体の動きが止まる。口の中につつすらと鉄の味が広がっていた。親指の腹で口の端を拭くと、そこに赤色があった。

「……………赦さねえ」

響いたのは、たった一言。握り締めた拳を胸の前に、キリヤは低く、そして静かに告げた。

「お前だけは、絶対に赦さねえ」

第七話 深夜の宴(5) - 君の声 -

「……ふん」

起き上がり、エルザードは鼻で笑った。片手で服の埃を払うように軽く撫で、口の端を伝う血を袖口で拭う。

「赦さない、ね。別に私は、過去の罪を懺悔しているわけではないのですがね」

床に落ちた眼鏡を拾い上げ、かけ直すエルザード。そんな様子を眺めながら、鋭いままの視線でキリヤが言う。

「眼鏡、外したほうがいいんじゃないか？」

「……それはまた、どうして？」

「失明する」

今度はキリヤがエルザードを煽り立てる番だった。遠回しにぶちのめしてやると言われているのだ。その言葉を受けてもエルザードは表情こそ笑みを崩さずにいたが、その目はすでに笑っていない。

「面白い冗談だ」

「すぐに分かる」

平静を装ったつもりが、二つ返事で切り返される。舐められていると嫌でも実感した。こんなガキに。

「……調子に乗るなよ、小僧」

「御託はいい。早くしろ。こっちは時間がもつたいないんだ」

血管の数本くらいは千切れたかもしれない。エルザードはもはや会話を続けることにさえ苛立ちを覚え、懐から取り出した黒いナイフを手に握って真正面から襲い掛かってきた。

「こ、の……ガキがああああつ！」

手にしたナイフは黒曜石の刃を持つものだ。神父という身の上の都合で携帯していたのかどうかは知らないが、叫んだセリフにしてはお粗末過ぎる武器にも見える。とはいえ、材質が何であれ凶器は

凶器。切られれば肉は裂けるし血も吹き出す。だがそれも

「う、ふ……っ!?」

「遅えよ」

素人の手によるバカ正直な動きであれば、避けるにまるで値しない。

カウンターの要領で、キリヤの蹴りがエルザードの腹に食い込む。人体急所の一つのみぞおちだ。もしかしたら多少は狙いがずれているかもしれないが、それならそれで肋骨の数本が砕けるかひび割れることになっているのでどちらでも構わない。

「げほっ！ お、え……げええ……っ！」

エルザードはその場に跪くように倒れ込むと、蹴られた腹を押さえながら胃の中のを片っ端から吐き出していた。詳しく分析すれば今夜何を食べたのかくらいは分かりそうなものだったが、そもそも目の前の下衆野郎の食生活なんてこれっぽっちも興味はない。考えただけでこちらがづられて吐き気を覚えてしまいそうになる。

「素人以下だな。武器を持てば自分が強くなれるとも思ったのか」
今なお咳き込みながら胃の中のを逆流させ続けるエルザードを上から見下ろし、キリヤは目の色を変えずに続ける。そこには哀れみも同情もない。あるのは怒りと、蔑みの色だけだ。

「立てよ。まさかこれで終わりってんじゃないだろ」

「あ……ぐ、げほっ、げほ……あ」

聞き終えるより早くキリヤはもう一度蹴りを放った。エルザードの顎を、つま先で勢いよく蹴り上げた。前屈みになっていた上半身が百八十度向きを変え、今度は仰向けの姿勢になって倒れていく。カランカランと乾いた音がした。よく見ると、白い破片がいくつかさその辺に転がっている。おそらくは今の蹴りで折れたエルザードの前歯か何かだろうが、キリヤは別に気にも留めなかった。これくらいで相手の体を気遣うほど、内に秘めた怒りは冷めていない。

「がっ、あああああっ！ あぐ、ぎ、あああああっ！」

悲鳴というよりも絶叫に近い何かが響いた。片手で腹を、片手で顎を押さえたまま、エルザードは鉄の床の上を無様にのた打ち回っていた。口の両端から、血と胃液とその他何かが交じり合った何だか分からない液体が溢れ、床の上を転がるたびに飛び散った。

そこにもう、修道服の似合う優しい神父の面影はなかった。正しくはキリヤがそうでなくしたと言い換えるべきだが。

「……………だよ」

苦痛に悶え続けるエルザードの前に、キリヤはわずかに震える声で呟いた。

「何で、お前らは……………こんな、こんなことが平気でできるんだ」

「が、あう……………う、ぎ……………がああっ……………！」

聞いたところでまともな返事が返ってくるはずがなかった。それがさらにいつそう、行き場のないキリヤの怒りを後押しした。

「何でだっ！ 答えろよっ！！！」

ガゴンと音が響く。それはキリヤがエルザードを殴りつけた音ではない。キリヤが殴りつけたのは、隣にある鉄でできた箱の表面だった。当然、生身の拳の一撃くらいでは鉄の箱は変形さえしない。

それどころか、反動でキリヤの拳の皮膚が少し裂け、指と指の間を生暖かい血が流れては落ちていく。

不思議と痛みはない。今いるこの場所が冷え切っていて、感覚が鈍くなっているからなのかもしれない。けどそれは、違う。きつと、違う。

「……………何でだ。何でなんだよおおおおっ！！！」

キリヤは叫んだ。叫び声は四方の壁、床や天井に反響して自分の耳が痛くなるほどに響き渡った。理解ができない。同じ人間なのに、どうしてここまで違ってしまふのか。どうしてこんな風になってしまったのか。どれだけ考えても、この場で答えは出そうになかった。それがただ、悔しくて。どうしようもなく、やるせなくて。

「……っ！」

キリヤはただ、両手を床にぶつけることしかできなかった。そしてそんな姿を、今更になって笑い飛ばす声がする。

「は、ははは……ひははは………」

見ると、仰向けに倒れたままのエルザードが血まみれの顔で笑っていた。だが、今はもうその耳障りな笑い声に怒りさえ覚えられない。キリヤの胸の中はとつくに冷え切っていた。これ以上痛みを与えてやるうという気にもならなかった。

「ひひ……青いんだよ、ガキが。この世界が、お前の思うような幸せに満ち溢れた世界だとしても、思ってたんのか？」

おそらくはそれがエルザードにできる最後の抵抗なのだろう。

あまりにも青臭すぎる理想を抱いた少年の心を、言葉の刃でわずたにしてやるうという、惨めを通り越した哀れな抵抗。

「バカが。そんな理想が形になってれば、誰が戦争なんておっぱじめるもんか。人も動物も、国も世界も、結局は同じなんだよ。喰うか喰われるかだ。弱者は常に強者の糧になるしかないんだよ。そうやって繰り返してきたんだ。俺達も、歴史だってそうだ」

下衆笑いを絡め、エルザードは続ける。

「自分の立ち位置を確かなものにするには、常に勝ち続けていくしかねえのさ。この世界は血と泥にまみれてる。背中を見せれば切られるし、見せられたら切りたくなる。甘っちょろい戯言で何かを変えられるほど、簡単な話じゃねえんだよ」

「……違う」

「違わねえさ」

「違う……違う！」

「認めちまえ！　そして絶望しろ！　この世界、居場所のない人間なんて吐いて捨てるほどいるんだよ！！！」

「　　そんなこと……ありま、せん………」

答えたのはキリヤではなかった。その声に、キリヤはゆっくりと後ろを振り返る。そこに

「……そんなこと、ないです……」

ハクアがうつすらと目を開けていた。意識は戻っているようだが、呼吸がひどく浅い。吐く息は驚くほどに白く、その体が冷え切って衰弱していることを示していた。

「ハクア！」

名を呼び、キリヤはすぐに駆け寄る。エルザードを殴り飛ばしたときに転がった黒曜石のナイフで両腕を縛る縄を切り、同様に足首を縛る縄も切った。

ようやく全身が開放されたハクアだが、縄で縛られていた部分は青くうつ血し始めている。肩に触れると、寒気を覚えるほどにその体は凍てついていた。一刻も早く医者に見せる必要がある。

「待ってる。すぐに医者に見せてやるからな」

「は、ははは……ははははは！」

そこでエルザードは高らかに笑った。相変わらず起き上がるところか手足すらまともに動けない体勢にもかかわらずだ。

「無駄だ。気付いてないようだが、この船はすでに港を離れて出港してるんだぜ？」

「っ……」

その言葉でキリヤは思い出した。ここにくる階段を下る前に、汽笛の音を聞いたことを。あれが出港前の合図だとしたら、確かに船はとっくに出港しておかしくない。いや、むしろ港に留まっていることのほうが不自然だ。

「く……！」

「ひははは！ どうだ、分かったか！？ お前の語る理想論なんて、所詮これっぽっちのものなんだよ！ 思い知れ。打ちひしがれる。自分の腕の中でそいつが息絶える瞬間を目の当たりにしやがれ！」

エルザードは愉快そうに叫んだ。まるでこれが、せめてもの復讐だと言わんばかりに。だが、それも別の意味で幻想であることを、エルザードは知ることになる。

「……盛り上がっているところ悪いが」

その声は、この部屋の入り口から聞こえてきた。キリヤとエルザードの視線が揃って同じ方を向く。そこにいたのは

「船は今も港に停泊したままだ。医者ももう、港で待機済みだ」
アクセルを含む、この任務に同行した騎士達だった。

「な……………」

「アクセル！」

その言葉に、それぞれの感情を表にするキリヤとエルザード。片方は希望。そしてもう片方が、さんざん言い続けてきた絶望というやつなのだろう。

「神父の方は任せる」

「ああ、任せておけ」

アクセルは仲間の騎士と二言三言交わすと、真っ直ぐにキリヤとハクアの元へとやってきた。

「全くお前は、この任務に参加させるための条件をあっさりと破り捨てやがって」

「……悪かったよ。でも、俺……………」

「ああ、分かっている。だがまずは、ハクアを医者に見せないとな。命に別状はないようだが、放っておいたら危険だ。運べるか？」

「え？」

「どうなんだ？」

「……大丈夫。俺が、運ぶ」

「よし」

それだけの言葉を交わし、キリヤはハクアを背負って立ち上がる。そのために、ここまで来たのだから。

「キリ、ヤ……君？」

「いいから、お前は少し寝てる。それと……呼び方、また戻ってるぞ」

「あ……」

「……ちゃんと運んでやる。だから、安心して眠ってる」

「……うん。ありがと、キリヤ……」

礼を言うのはこっちの方だと、キリヤは声に出さずに胸の内ですいた。だから今は、ゆっくりと休んでほしい。

目が覚めたら、届けたい言葉があるから。

第八話 雨上がりの人々

目が覚めると、そこはまた同じ場所だった。

「……………」

「気が付いたか？」

一つ違ったのは、横には見知った少年の顔があったということだ。キリヤはベッドの横で椅子に腰掛け、ゆっくりと目覚めたハクアに声をかける。

「体はどうだ？ まだ痛むか？」

「…………ん。まだちょっと、うまく動けないかも……………」

小さく言ってハクアは笑う。が、その表情はまだどこか痛々しいものが残っている。布団に隠れて見えないでいるが、ハクアの体はあちこちが傷だらけだった。幸い命の危機に繋がるような深刻なものではなかったが、それでも体中の至るところに包帯を巻かなくては、その傷跡を隠せないでいる。

「っ、痛……………」

「っ、バカ。まだ無理すんな」

それでも半ば強引に起き上がろうとするハクアの両肩を軽く制し、そのままもう一度ベッドの中へと押ししていく。とてもじゃないが、まだ二本の足で満足に歩くことさえできる状態ではない。

「あ、はは…………ごめんね」

「…………何でお前が謝るんだよ。いいから、おとなしく寝とけ」

「…………うん。ごめん、ね……………」

「……………謝るなよ。頼むからさ……………」

あれから二日が過ぎていた。

船内でエルザードを含めた一定数の犯罪者達を捕らえることもでき、彼らの言うパーティーを未然に防ぐことができたので、とりあえず任務の上では成功と言えるだろう。

だが、その代償はあまりにも大きかった。少なくとも、キリヤにとっては大きなものであってしまった。その結果が、今こうして目の前にいるハクアの姿だったのだから。

アクセルの言葉を借りるなら、事情はどうあれハクアを救ったことに変わりはない。無傷というわけにはいかなかったが、それでも最悪の事態だけは免れたのだから、今はそれを素直に喜ぶべきなのかもしれない。だが、それでも

「……………」

言葉には出さず、キリヤは思う。確かに目の前にいるハクアは、傷だらけではあるがこうして呼吸をし、生きている。結果としてそれは助けられたという一言で表現できるものかもしれない。分かっているのだ。ただ、納得できていないだけ。今だって鮮明に思い出せる。あの船の中で、ハクアを見つけたときのこと。そのときのハクアの姿を。とてもじゃないが、良かったの一言で済ませられるわけがない。

「……………少し、聞いてもいいかな？」

「……………ん、どうした？」

「神父様は、どうなったの？」

「……………エルザードは、騎士団の管轄で拘束中だ。数日もしないうちに王都に移送して、そこで正式に罪を裁かれる。どう間違ったって、極刑か終身刑は免れないだろうな」

「……………そう、なんだ」

一言だけ返したハクアの声は、どこか悲しげだった。あんなことがあったというのに、それでも他人の身の上を心配してしまうのはやはり優しさのせいなのだろうか。いや、他人ではないからだろう。こんな結末にこそなってしまったものの、やはり何年という長い年月を共に過ごし、少なからず尊敬もし、もしかしたら父親にも近い感情を寄せていたかもしれない人。その人が罪を犯し、これから裁かれると知ったら、誰だってこんな風になるのかもしれない。もっ

とも、その気持ちはキリヤには理解できないものではあるのだが。

「……私、ね」

「ん？」

「……私、両親がいないの。お母さんは私が小さい頃に病気で死んじゃった。お父さんは私が生まれる少し前に事故で死んじゃったらしくて、写真でしか顔を知らないの。他に身寄りもいなくて、お母さんが死んじゃってすぐ、私は孤児院に預けられたの。その私を引き取って育ててくれたのが、神父様だった」

「……………」

「七歳の頃、だったと思う。私が神父様に引き取られて、今の修道院にやってきたのは。最初は全然人と話せなくて、部屋の中に閉じこもってばかりだった。私、お母さん以外の人とあんまり話したことなかったし、特に男の人はちょっと怖いイメージがあつて、友達もいなかったから」

「……そっか」

「それでも何とか、普通の生活には少しずつ慣れていった。お母さんがいなかったのは寂しかったけど、寮のシスター達もみんな良い人で、引っ込み思案な私にも優しくしてくれた。中でも一番仲良くなったのが、エリーナさん。昔はよく、一緒にいたずらしたりして揃って神父様に怒られたりもしたんだ。エリーナさん、ああ見えて結構お転婆でね。大体、エリーナさんの悪巧みに私が巻き込まれて、一緒に叱られちゃうんだけど」

「……………うん」

「……神父様、ってね。普段はすごく物静かで、誰にでも優しい人なんだ。でも、起こるときはちゃんと怒ってくれるの。一生懸命、怒ってくれたんだ。私も、何度怒られたか……あはは、数え切れなくて、覚えてないや……………」

「うん」

「……………本当、に……………優しい、人、で……………いっぱい、怒られ
たけど……………同じくらいいっぱい、優しく……………優しく、して……
くれ、て……………」

「……………」

「笑った、時の……………顔が、写真で見たお父さんと、少し似てて……

……………血も、繋がってないけど……………本当の、ほん、とうの……………」
ぼろぼろと、隠すこともなく大粒の涙が零れ落ちていた。拭って
も拭っても、透明な雫はあとからあとから溢れ出てくる。痛みもあ
る。苦しみもある。悲しみもある。だけどそれ以上に、沢山の思い
出が胸の中にあつた。無理に抑え込もうとするたびに、あの日の景
色が頭に浮かんでは消えていく。

「……………」

「本当の、お父さんみたいに、思えてたのに……………家族だつて、
ずっと、思ってたのに……………！」

最後の方はもう、半ば叫び声のようになっていた。ハクアは痛み
の残る腕で必死に目元を覆い隠しながら、それでも溢れる涙は留ま
ることを知らなかった。ぐちゃぐちゃになっていく。どこからどこ
までが本当で、どこからどこまでが夢だったのか。

「……………痛いよ」

「……………」

「痛いよ、キリヤ……………」

「……………」

「傷のせいじゃないの。こんなの、いくらでもがまんできるよ。で
も、違うの。忘れようとするたびに、思い出しちゃう。全部、忘れ
ちゃえばいいって分かっているのに……………痛いよ。苦しいよ。辛いよ。

悲しいよ。寂しいよ。どうして……………こんなに……………！」

「……………分かっている。分かっているから」

そつと、キリヤはハクアの手を握る。包帯が巻かれた、まだ痛々
しい手だ。それでも、少しだけ強く握った。ここにいることを示す

ために。一人ではないことを、証明するために。

「お前は、ここにいる。俺だって、ここにいる。だから、もうお前は、一人じゃない」

「……っ、う……うああああ………っ！」

ハクアは泣き崩れた。胸の内側にたまっていた不安が、膨らみきった風船のように破裂したかのようだった。忘れたくないという思いと、忘れなければいけないという思い。どちらが欠けても、きつとのこ先の日々を自分の足で歩いていくことなんてできない。どれだけの痛みがその体に残っても、昨日までの記憶を書き換えることなんてできっこない。今日まで歩んできた日々を、否定することなんてできない。矛盾だらけの頭の中はぐちゃぐちゃになって、思い出だけが通り過ぎていく。だから、涙は溢れてくるんだろう。泣けない心の代わりに、泣いてあげているんだろう。新しい明日を歩き出すための最初の一步を、力強く踏み出せるようにと。そっと、背中を押してやっているんだろう。

それからさらに一週間が過ぎた。

「本当にもう大丈夫なの？ もっとゆっくり休んでいいのよ？」

「いえ、大丈夫です。もうすっかり歩けるようにもなりましたから。玄関先でのハクアとリノのやりとりだ。この一週間でハクアの体の具合もほぼ回復し、体中のあちこちにあった包帯もほとんどが取れている。」

「遠慮なんてしないでいいのに」

「そうだよ。ハクアちゃんがいなくなっちゃったら、うちのギルドの貴重な女の子成分が激減し」

そこまで言いかけたところで、リノとメルFINEの二人が揃ってアルフレッドを撃退した。けっこう鈍い音がした気もするが、まあ命に別状はないだろう。

「まあ、君が自分で決めたことなら俺は黙って見送らせてもらうさ。ただ、今後のことは考えているのか？ 修道院の方は、まだ色々と問題も残っているだろう？」

「はい。でも、とりあえずは一度戻らないと。エリーナさん達にもいっぱい心配かけちゃったから……」

「……分かった。ただ、何かあったら、遠慮なくすぐに俺たちを頼ってもらって構わない。くれぐれも無理はしないようにね」

「はい。色々とお世話になりました」

小さく頭を下げ、ハクアは言った。

「それじゃ、失礼します」

玄関の扉を押し開ける。最後にもう一度振り返り、頭を下げた。アクセル達は、揃って笑顔でその旅立ちの瞬間を見送った。ただ一人を除いて。

久しぶりの街並みだった。が、あいにくと天気は下り気味で、頭上には灰色の空が広がっている。もしかしたら一雨くるかもしれない。ハクアはとりあえず道なりに歩くことにする。

「何か、懐かしい。ほんの数日のはずなのに」

目に映る景色は特別なものではない。いつもと同じ、賑わいを見せる通り。行きかう人々と、商人達の掛け声。すれ違う人の足音や、微かに香る春の風の匂い。毎日のようにすぐ隣にあった何もかもが、今は不思議と新鮮さを感じさせた。

ハクアは人通りの多い中央通を歩く。昼前のこの時間も、やはり人の数は多かった。賑やかな人の波をゆっくりと抜け、少しずつ前へと歩き出す。と、そこで

「……雨？」

ぼつりと頬を打つ雨粒に、ハクアは空を見上げる。灰色の空は一

面に広がり、天空からいくつもの雫が降り始めたところだった。道行く人々も雨に気付いたのだろう、早足で通りから離れたり、家路へと急ぐ姿が見て取れる。露天商人達は軒先へと品物を引っ込め、屋根の下でそのまま商売を続けていた。さすが商売人、雨ぐらいじやへこたれない。

「どうしよう。修道院まで走っても、絶対ずぶぬれになっちゃうし……」

わずかに迷ったが、ハクアは手近にある軒先の下に避難することにした。いつ止むかも分からない雨ではあるが、雨の中をずぶぬれで走って風邪を引いてしまうよりはいい。屋根のある場所であれば様子をみることにする。

だが、しばらくしても雨脚は弱まることはなかった。むしろ強くなっている。あちこちに水溜りができ始めると、さすがの露店商人達も商売にならないと判断したのだろう。各々に店じまいの支度を見せ、荷物をまとめて家の中へと戻っていく。ハクアと同じように軒先に身を隠す人も少なくはなかったが、その中の何人かは意を決して雨の中へと飛び込んでいく姿もあった。なかなか雨脚が弱まらないので、業を煮やしたのだろう。

「……なかなか止まないな」

曇った空を見上げながらハクアは呟く。雨のせいか、気温も少しずつ冷え込んできたような気がする。さっきからわずかに身震いを繰り返しているのはそのせいかもしれない。

「……そういえば。キリヤ、どこに行ってたんだろ？」

ふと思い出す。今しがた別れてきたとき、そこにキリヤの姿はなかった。リノに聞いた話だと、どうやら朝から姿が見えていないとのことだった。理由は分からない。

「ちゃんと、挨拶しておきたかったんだけどなあ……」

「……何がだ？」

「え？」

その声にふと隣を見てみると、どういわけかそこに当人のキリヤが立っていた。

「うわぁ!？」

「何だよ。人をバケモノみたいに……」

思わず大声を出して驚くハクアに、キリヤは少しむくれた表情で言葉を返す。が、その表情よりも何もよりも目立ったのはキリヤの体だ。

「……キリヤ、ずぶぬれじゃない？」

「そりゃな。雨だから」

頭の上からつま先まで、雨に打たれていないところがないくらいにキリヤはずぶぬれだった。前髪を伝って雨粒がぼたぼたと落ちているし、服も水分を吸って色が変わり、見るだけでずいぶん重苦しそうだ。

「風邪引いちゃうよ」

「平気だ、これくらい」

「だめだよ。あ、ちょっとそのままじっとしててね」

「何だよ……って、おい！ バカ、何すんだ！」

「いいから。ほら」

「むぐ……」

ハクアは荷物の中から白いタオルを取り出すと、それでキリヤの頭の水気をふき取っていく。抵抗こそしたものの、思ったよりもハクアが躊躇なしに体を密着させてくるので下手に暴れたら大変なことになる。そう悟ったキリヤは、本意ではあるが黙って頭を拭かれるのだった。

「……よし。これで少しは大丈夫かな」

「……ったく、お節介なやつ」

「でも、何でこんな雨の中走ってたの？ 朝からギルドにもいなかったって、リノさんが言ってたけど」

「……別に。ちょっと、野暮用」

「ふーん……」

「……何だよ？」

「ううん。何でもない」

「……」

そこで一度会話が途切れ、二人の視線は雨が振り続ける景色へと移る。相変わらずさっぱり止む気配を見せない雨だ。目の前の通りにはすっかり人の姿はなくなっていた。こうして軒先の下で雨が止むのを待っているのも、いつの間にか二人だけになっていた。

「……お前さ」

「うん？」

「その……これから、どうすんだ？ エルザードがあんなことになつちまつて、修道院の方もまだ色々と混乱が収まってないんだろ？」

「……うん。しばらくは閉鎖になるだろうって、アクセルさんから聞いた」

「じゃあ、どうすんだよ」

「……分からない。私、あそこしか行く場所、ないから」

「……」

ハクアの表情がわずかに沈む。分かっていたこととはいえ、聞いてはいけなかったことなのかもしれない。だが、今のまま修道院の寮に戻っても、何かが変わるとは思えない。それはキリヤもそう思っているし、他でもないハクア自身もうすうすと気付いていることではあった。

「……なあ。俺達のギルド、何て名前か誰かから聞いたりしたか？」

「え……ううん。聞いてないよ」

「そっか……」

「……それが、どうかしたの？」

「……」

キリヤは一瞬だけ迷った。が、その迷いをすぐに振り払った。そ

れが正しい道かどうかは分からない。決めるのはハクアだ。でも、言葉にしたかった。言葉にしなければ、きっとどんな思いも届かない。どんな奇跡も起こらない。どんな祈りも届かない。そう、思えたから。

「 来いよ。俺達のギルドに」

「 え……………? 」

当然のように、ハクアは呆然としていた。口は小さく開いたまま、今何を言われたのかをしっかりと理解できてないようにも見える。というか、唐突過ぎて全く理解していない。

「 ……いや、その……………嫌だってんなら、無理にとは言わない。ただ、もしお前が嫌じゃないなら……………」

「 ………………」

「 一緒に暮らさないかって……………って、今はリノやアクセル達の言葉だからな!? ま、まあ、俺も含めてギルドの全員の意見でもある……………けど……………っておい、聞いているのか? 」

「 ……あ、ごめん。その、いきなりだったから、その……………びっくりして」

「 いや……………勝手に話進めて、俺も悪かった。けど、今の話は嘘じゃない。皆で話して、そういう選択肢もあるんじゃないかってなったんだ」

「 でも、私……………」

「 ……俺も、お前と同じ孤児だ」

「 ……え? 」

悩むハクアに、キリヤは唐突過ぎる言葉を投げる。

「 親父は戦争で、母さんは病気で死にしまった。母さんは戦争から逃げながら必死に俺を育ててくれたけど、無理がたたって体を壊して、それっきりだ。戦争が終わって、俺は孤児として施設に引き取

られた。まあ、その後色々あって今はこうしてるけどな」

「そう、だったんだ……」

「……別に、だからってのが理由じゃない。けど、うちのギルドのやつらは、そんな俺にちゃんと真正面から向き合ってくれた。生まれとか育ちとか、そういうの全部まとめて俺を受け入れてくれた。アクセルはくそがつくくらい真面目で堅物だし、リノは口うるさいし、アルは何考えてるかさっぱりわかんないし、メルフィネは人の飯まで食うし、ユーグはエロい」

「……う、うん……？」

最後の一言にややハクアが引くが、構わずキリヤは言葉が続けた。「それでもあいつら、俺のことを特別扱いなんてしない。普通に接してくれる。全部失くして空っぽだった俺に、新しい道を示してくれた。だから……」

「……………」

「だから……お前も、きつとまた歩いていける。信じる。俺だってできたんだ。お前にだって……ハクアにだって、絶対にできる。それでも、どうしても歩くのが辛くなった、そのときは……」

一度だけ深呼吸。目を閉じ、そして開く。真っ直ぐに視線の先のハクアを見て、キリヤは言う。

「そのときは、俺が手を貸してやる。俺達が、お前を支えてやるから。だから……」

「……………うん」

その先の言葉は、言われなくても分かった。分かってしまった。だって、目の前の少年はこんなにも真剣な眼差しで語りかけてくれる。その瞳の色に、嘘はない。信じられると、心がそう叫んでいた。

「あ、そつだ。キリヤ」

「何だ？」

「一つ聞いていい？」

「だから、何だよ？」

「さっき言つてた、ギルドの名前つて結局何だったの？」

「ああ、それか。それなら……」

言いかけて、キリヤはドアを開ける。

二人は戻ってきた。

これから始めるための、屋根のある場所へ。

「「「「「「」」」」」」

ギルド、【雨宿り】へようこそ」「」「」「」

扉の向こう、新しい家族を招き入れた六人が揃つて声を上げた。

第八話 雨上がりの人々（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
作者の harukana と言います。

ひとまずこれでプロローグ的な部分がおしまいとなります。

本編はこれからゆっくりと時間を書け、格キャラクターのエピソードなどを織り交ぜつつ軸となる長編のストーリーに移っていきたいと思っています。

具体的な流れはまだ決定してはいませんが、そこは追々うまくやっ
ていければと考えています。

まずはここまでお付き合いくださってありがとうございます。

もしもこの作品が気に入っていただけたのであれば、今後もまた暇
なときに目を通してやってください。

感想、質問、評価などなど、お気軽にどうぞ。

自分でも気をつけるようにしますが、誤字などの指摘もあればぜひ
お願いします。

それでは、今回はこれで。

第九話 王都へ（前書き）

第一章を読んでいただきありがとうございます。

今回が第二章部分の冒頭部となります。

気に入っていただけたら、ぜひお付き合ってください。

第九話 王都へ

潮の匂いがする。風は穏やかで、空は青く澄み渡っている。力強く帆を揚げて走る船と併走するように、数匹のカモメが空を泳いでいた。

「わあ……」

甲板の先頭部分、ほとんど船のへさきに近い場所でハクアは感嘆するように声を上げた。吹き付ける風を全身で受け、香る潮風に鼻腔をくすぐられ、暖かな日差しを浴びて静かに目を閉じた。

「気持ちいい……」

「……気持ち悪い……」

雰囲気もへつたくれもあつたもんじやない言葉が聞こえた。見ると、ハクアの立つすぐ隣ではキリヤが顔を真っ青にして壁に背中を預けていた。目にはまるで生気が感じられないし、手足もだらしなく船体の上へと投げ出している。要するに、酔っていた。

「つたく、相変わらずお前は船酔いには弱いな。馬や馬車じゃ全然酔わないくせに」

そういつて呆れた様子で声をかけたのはアクセルだ。見た目にもやや重量感のある騎士の鎧に身を包み、腕にはガントレット、足にはグリーブと呼ばれる金属製の防具が付けられている。が、当のアクセルはそれを重荷に感じている様子はない。普段どおりに歩き回っている。もしかしたら素材もただの金属ではなく、軽くて耐久性の高い物を使うなどして工夫がなされているのかもしれない。

「ほら、しっかりしろ。もう少しで王都に到着だぞ」

「……う、げえ……。だから、俺は陸路を行こうって……言ったんだ……」

「あほか。北周りのルートで王都へ向かおうものなら、馬を使っても丸一日近くかかるんだぞ。その点、船なら直進距離でたったの三

時間だ。時間的にも経済的にも船の方が効率がいい」

「俺は、気分がよくない……おえっぷ」

「やれやれ……」

今に始まったことじゃないけどなと付け足して、アクセルは溜め息を吐き出す。そんな様子を怪訝そうに伺っていたハクアも会話に参加する。

「キリヤ、船だと酔っちゃうの？」

「ああ。コイツは昔から、どういうわけか船だけが苦手だね。時々こつして王都まで行くこともあったんだが、毎回のようにこの調子だ。まあ、変に落ち着きがないよりはましなんだが……」

「う、うるせー……人を、暴れ馬みたいに、言うんじゃ……おえええ……」

「……えっと、確か」

そんなことを呟くなり、ハクアはその場に膝を折ってキリヤの手を取る。普段のキリヤならすぐに手を引っ込めてしまうところだが、船酔いでつぶれているこの状態ではそんな余力も残っていない。

「な、何……すんだ？」

「手のひらのつぼを押すと、少しは気分が良くなるって聞いたことがあるの」

言いながらハクアはキリヤの手のひらのあちこちをぐいぐいと押していく。あちこちという時点で、ハクアにもそのつぼとやらが正確にはどの辺にあるのかは分かっていない。要するに適当なわけだが、一応効果はあったようで。

「……」

「どっっ？」

「……分かんねえ。分かんねえけど……少し、楽になった……気がする」

「うん。なら、良かった」

「……ずいぶんと世話のかかる騎士だな」

そんな会話をしていると、船の汽笛が響き渡った。アクセル達以外の乗客も、その音につられて各々の会話が一度中断する。

「間もなく王都、セイムブルグへ到着します。船を下りる方は荷物など、忘れ物のないようお願いします。繰り返します。間もなく

……」

「つと。どうやらそろそろみたいだな」

「……ようやく、開放される、のか……」

「王都かあ。どんなところだろ。私、初めてだからすごく楽しみです」

「まあ、特別どうというわけではないさ。城へ行く途中、色々と案内しよう」

「はい」

「うっ……岸は、まだ……か……」

三人がこうして船で王都へと渡ったにはそれぞれ理由がある。

アクセルとキリヤの二人は、先日の人売りの事件に関しての報告と聴取をするためだ。その旨が記載された手紙が届いたのは、昨日のことになる。本来ならばここにハクアが同行する理由はなかったのだが

「私、王都にはまだ行ったことがなんです。それどころか、この街から一步も外へ出たこともないかも……」

というハクアに、外の世界を見て認識を広めるのも一つの経験になるという答えが出され、今回の呼び出しに同行することになった。もっとも、城内には騎士団関係者が王族、もしくはそれに仕える者しか立入を許可されていないので、二人が城で要件を済ませる間は別行動となってしまうのだが。

その旨を伝えた上で、ハクア自身も行ってみたいということだったので、こうして三人はちょっとした船旅を終えてここまでやって

きた。王都、セイムブルグへと。

王都セイムブルグ。

アトラクア大陸の西の端に位置する大都市だ。東には海を挟んでキリヤ達の暮らす街、ジェリオの街があり、海路と陸路の両方で行き来が可能。陸路を通る場合は大きく北を迂回する必要があるのが、よほどの理由か物好きでない限りは海路が主な交通手段となる。が、年に数回海の荒れる次期が長く続くことがあり、その時期だけはこの遠回りな陸路も旅人の姿でにわか賑わいを見せることもある。

王都には国を治める王、クリストフ・ウィル・リリアネス……八代目クリストフ王が構える王城の他、騎士団の本拠地でもあるリリアネス騎士団総本部、多くの聖職者達が集う聖リリアネス大聖堂、各地に点在するギルドを管理するギルド管理局の本部などが所狭しと揃っている。

船を下りた三人は、とりあえずキリヤがまともに二本の足で歩けるようになったのを確認してから歩を進めた。王都ともなれば、行き交う人の多さだけで逆に眩暈を起こしてしまいそうになる。

「すごい人の数ですね……」

「仮にも西大陸最大の王都だからな。大陸の西の端であるこの街を境に、道は大きく南北へ分かれているんだ。北は東に寄っていけば俺達の住むジェリオの街へ。真っ直ぐ北に進めば北大陸との国境に続いている。南には砂塵地帯が広がっているが、途中で砂漠の街と呼ばれるコゼットがある。主に、砂漠に行く人々の中継地点になっている街だ。それほど大きくはないが、旅人には必要不可欠な街だから意外と人が多い」

「詳しいんですね、アクセルさん」

「騎士団の遠征で、大陸は一通り見て廻ったよ。もう昔のことだけどね」

「俺もそのうち、参加することになるのか？」

「無事に騎士の昇級試験に受かったらな。まあ、今のお前にはいろいろな心配だろうがな……」

「ふん。見てろよ、すぐに試験に受かって、見習いなんか卒業してやる」

「……まあ、そういう意味じゃないんだがな」

「え？」

そのアクセルの咳きはどうやらキリヤには聞こえておらず、代わりに耳で拾ったのはハクアの方だった。どういう意味かは分からないが、その言葉を口にしたときのアクセルの表情は少しだけ悲しそうに、辛そうに見えた気がした。気がしただけだから、もちろん気のせいなのかもしれない。

しばらく歩くと、いよいよ目の前に城の巨大な城門が見えてきた。とにかくでかい。高さだけでゆうに二十メートル以上ありそうだが、がっしりとした岩の壁が聳え立ち、入り口はまるで巨大な化け物が口を開けているかのように見える。その城門の真下は橋になっている。橋の下はこれまた高さが五メートル以上はありそうな深い濠になっており、その下は用水路なのだろうか、水の道が張り巡らされているようだ。

三人が橋の上を渡り終わるところで、城門前に立っていた屈強な鎧に身をまとった二人の兵士のうち、一人が動いた。がしゃがしゃと音を立てる鎧は本当に重苦しそうだ。

「止まれ。許可証の類は持っているのか？」

「ああ、ここにある。騎士団長、グレン殿からの呼び出しでやってきた」

アクセルが懐から手紙を取り出し、城門の兵士へと手渡す。内容に一通り目を通した兵士は、目配せでもう一人の兵士へと視線を投げると互いに無言で一つだけ頷いた。

「失礼しました。ジェリオの街の遊撃騎士、アクセル殿でお間違いないですね？」

「そうです」

「グレン騎士団長よりお話は何っています。今の時間だと、おそらく中庭の辺りにいらっしやると思いますが、まずはそちらをお尋ねください」

「分かりました。お勤めご苦労様です」

アクセルの返事を聞くと、城門の兵士二人は揃ってそれぞれの拳を右胸の前にかざした。これがリアネス騎士団の騎士達との挨拶のようなものだ。

「よし。行くぞキリヤ、付いて来い」

「そりゃいいけどさ。ハクアはどうするんだ？」

「できることなら一緒に行動をしたいが、今回呼ばれたのは俺とお前だけだ。残念だがハクアは城内に入ることはできないな。出発前にも言ったように、どこかで時間を潰してもらうことになるが……」

「つつても、なあ……」

キリヤとアクセルは揃って街並みを見渡す。王都の治安は比較的安全だが、さすがに人が多すぎる。右も左も分からない街では、あっさり迷子になってしまう可能性も少なくない。とはいえ、いつ終わるかも分からない用件が終わるまでここで待たせておくわけにもいかないだろう。

「あの……私だったら、大丈夫です。ちょうど、大聖堂を見学しておきたかったから、そっちで時間を潰してます」

「……すまないが、そうしてくれるか。道もここから右へ真っ直ぐ行けば着くし、迷うこともないだろう」

「はい」

「……………」

「では、用件が済んだら迎えに行く。なるべく手短かに済ませるよ」

「いえ、大丈夫ですから。ほら、キリヤも行かないと」

「ん……ああ」

それだけ言って、三人はその場で一度別れる。とりあえずハクア

の背中が見えなくなるまで二人は城門から見送って、それから巨大な門の下をくぐって城内の広い中庭へと足を踏み入れた。

中庭には人影は少なかった。当然だが、誰でも気軽に城の中へと足を踏み入れられるわけではない。先ほど城門の兵士がそうだったように、中へ入るには手順を踏んで許可を取る必要がある。基本的に騎士団上層部の人間や直接城に仕える者を除き、厳しく取り締まるのが通例だ。戦争が終わってだいぶ時間は経つが、今なお王族の命を狙う不穏な動きを見せる輩は後を絶たない。そのための最低限の用心と考えればそれも頷けるだろう。

アクセルとキリヤ、二人は城門の兵士の言葉に従って中庭の上を歩く。一口に中庭と言っても、これだけ巨大な城の中にある庭が並大抵の広さであるはずがない。目的の人物であるグレンを探すのもこれは一苦労しそうだ。

「……………なあ、アクセル」
「何だ？」

そんな道の上、一歩先を歩くアクセルの背中にキリヤが声をかけると、アクセルは振り返らず立ち止まらずに背中越しに聞き返す。

「ハクアのことだけだ」

「……………安心しろ。確かに絶対安全とは言えないが、仮にもここは王都だ。ジェリオの街よりも人が多い分、巡回してる騎士の数も多い。この街の中で悪事を働こうなんてやつはそうそういやしないさ」

「そうじゃない」

「……………そうじゃない、とは？」

「一緒に連れてこれたんじゃないか？ 同じギルドのメンバーだって話せば、ハクアだって一緒に城の中に入れたはずだろ？」

「……………どうだろうな」

「はぐらかすなよ。普段のアクセルなら、例え王都でも身の安全を第一に考えて一緒に行動するべきだって言うはずだ」

「……………」

「……何か、理由でもあるのかよ？」

「……すぐに分かる」

それだけ答えて、アクセルはやはり一度も振り返らずに歩き続ける。その背中が、普段と比べて少しだけ小さく見えたのは気のせい
か。

やがて、二人は目的の人物の姿を発見した。遠めでも分かるくらいの巨体、見ているだけで疲れそうになるくらいの重量感溢れる甲冑に身を包んだ大男。

「おお、来たか」

やってくる二人の姿に気付き、男は体の向きを変える。百九十センチに届くかという大きな背丈。全身を包み込む銀の甲冑。生身の部分なんて首から上くらいしか見当たらず、その髪の色はまるで鮮血のように真っ赤に染まって逆立っていた。よく見れば、額には大きな十字傷のような跡がある。

「お待たせしました、グレン殿」

「何、呼び出したのはこちらの方だからな。遠路はるばるよく来てくれた。元気そうで何よりだ」

「グレン殿こそ。むしろ、以前会ったときよりも若々しく見えるくらいです」

「ははは。その歳で世辞など嗜むな。俺はまだまだ現役のつもりなのだからな」

「いえ、そういう意味では」

「分かっている。それより」

「……はい」

二人の会話が中断し、その視線がキリヤに揃う。視線を受け、キリヤはとりあえず深く頭を下げた。目の前にいるのは騎士団の中でも最高クラスの位置に立つ騎士団長だ。素直に敬意を込めてお辞儀をする。

「ふむ。名は何と言う?」

「キリヤです」

「キリヤか。アクセルからの報告は受けている。先日の人売りの一件、ご苦労だった」

「あ、ありがとうございます」

「アクセル。もう一度聞く。お前の報告に、一切の偽りはないのかな?」

「はい。全て事実です」

「……分かった」

グレンは一度小さく溜め息をつく、再びキリヤへと向き直る。心なしか、その視線がわずかに鋭くなっているように見えて、キリヤはわずかに気圧された。

「キリヤよ。俺はリリアネス騎士団、騎士団長の名を戴く者だ。名はグレン・カルディオ。ぶしつけだが、この場で騎士団長の名に置いて先日の働きに対して決を下す」

「……決?」

一瞬だけ静まり返った中庭に、グレンの言葉が突き刺さる。

「キリヤよ。今この時をもって、お前から騎士見習いの称号を剥奪する」

第十話 揺れる王都

「称号の、剥奪……？」

目の前に突きつけられた言葉を、キリヤは無意識のうちに反芻する。

「いかにも」

対して、たった今そう告げたばかりのグレンは同じ口調で付け加えた。

「先日の一件、結果だけ見ればお前は十分に活躍しただろう。発の実践任務にしては十分に上出来だ。だが、規則は規則だ。お前がアクセルとの約束を破り、単身で危険な行動に出たこともまた事実。

結果はどうあれ、個人の勝手な行動は戦場において部隊そのものを危険に晒す行為に等しい。よって、俺はそれ相応の罰を与えねばならん」

「……………」

グレンの真横でその話を聞くアクセルの表情はどこか苦しそうに見えた。不本意ではあると、その顔が物語っていた。だが、アクセルもまた騎士団に所属する騎士の一人だ。規則には従う必要がある。例えそれが、同じギルドの仲間で弟のような存在であったとしてもだ。

「……………だから、ハクアをつれてこなかったのか。そういうことが、アクセル」

「……………そうだ。ハクアがこの場に居合わせれば、あの子はきっとお前の味方になるだろう。事情を説明し、グレン殿の決定を覆そうとしただろう。全ては私を助けるための、仕方のないことだった、とな」

「……………分かった。その後は大体、俺も予想できる」

きつとハクアは、グレンに対しても一步も引かずに食らい付くだろう。決定が翻るまで、てこでもこの場を動こうとしないかもしれない。それ以上に、ハクアは自分を責め続けるだろう。全ての原因は自分にあるとか言い出して、涙を零し始める姿さえ容易に想像ができる。それは、嫌だ。どれだけ自分のことを思ってくれての行動だとしても、そんな光景は見たくない。

「……グレンさん。称号を剥奪されたらどうなるんですか？」

「見習いの称号を再び求めるというのなら、再度試験を受けてもらうことになる。が、再試験を受けるには剥奪されたその日から百日が経過してから出ないと受験資格は戻らない」

「はあ……。これから昇級試験つてときに、また一からやり直してわけか……」

「そういうことだ。諦めるか？」

「いえ、全然」

二つ返事でキリヤは答えた。たった今称号を剥奪されてただの一般人に成り下がったというのに、その目はすでに前を向いている。

「百日か。ま、基礎をやり直すにはちょうどいくらいの時間かな。それが終わったら、また試験を受けられるんですね？」

「む？ ああ、うむ……。お前、不服ではないのか？」

「何がですか？」

これまた二つ返事で聞き返すキリヤに、グレンは目を丸くする。

そして一拍の間を置いて、その巨体に似つかわしい豪快な笑い声が響く。

「ふ、ははは。がはははは！ いや、これは参ったな。不本意な罰を与えた俺の方が笑わされるとは、いやはや……。全く持って気分がいい」

「グレン殿……」

「ああ、すまんアクセル。一番不本意であったのは他でもないお前自身だったな。だが、見ての通りだ。この分だと、お前のは杞憂で

あつたのではないか？」

「……どうやら、そのようです。まあ、心のどこかでこうなることを分かつていた自分も確かにあつたのですがね」

「……二人とも、揃って俺のこと試してたんだな？」

「そうむくれるな。試すような物言いになつてしまったことは詫びよう。だがな、お前の本当の気持ちを知りたかつたのだ。アクセルの言葉や手紙の内容ではなく、本人の言葉そのものでな。だが、はつきり言つて安心したぞ」

そこまで言つとグレンは一度言葉を区切り、その手をキリヤの肩へと軽く置く。大きな手だった。頭をそのまま鷲掴みにできるくらいはある。無骨で、傷跡の多い手だった。きつと今までも、沢山の戦いの中に身をおいて、剣を振るつてきたのだろう。そしてこれからも、必要とあらば戦いの中で剣を振るうのだろう。騎士団長、グレン・カルディオオン。その手は大きく、温かかった。

「キリヤよ、騎士になれ。お前のようなやつは、いつの時代も必ず必要になる。そしていつか、お前のようなやつが先頭を切つて道を切り開き、新たな時代を作つていくときが来る。そのときが来るまでは、俺達の背中を追い続ける。だが、いつかその新しい時代が切り開かれたそのときは、次の時代の人々にお前の背中を見せてやれ」

それだけ言つと、グレンはキリヤの肩から手を離し、背中を翻した。大きな背中だ。きつと今も、多くの騎士達がこの背中を見て生きているのだろう。そしてこれから、生きていくのだろう。ここから繋がる、新しい時代へと。

「お前が騎士になるその日を、楽しみにしているぞ」

最後にそれだけ言い残し、グレンはその場を去つていった。その背中が見えなくなるまで、キリヤとアクセルはずつと目で追い続けていた。

「すごい人だろう」

「……ああ」

「俺が騎士の称号を得た日も、グレン殿に今と同じことを言われたよ」

「アクセルも？」

「ああ。多分、俺達だけじゃない。今いるおおくの騎士達が、あの人に同じ言葉をかけられている。あの人の言葉は嘘がなく真っ直ぐで、非常に分かりやすい。だからだろうな。やってやるといって、そんな気持ちにさせられるんだ。たとえ戦場で敵の軍勢を前に劣勢を強いられても……あの人の言葉一つで、士気が何倍にも膨れ上がるような……不思議な人だよ、本当に」

「……そうだな。アクセルの言うことも、何となく分かる気がする」「そうか」

「何となく」

「で、実際はどうなんだ？」

「どうもこうもないさ。意地でも騎士になってやる。そのときにまた、改めて挨拶に来るよ」

「……がんばれよ」

「何だよ、気持ち悪いな。言われなくなっちゃってやるさ。百日なんて、きつとあつという間だからな」

「ああ、そうだな」

二人は再び城門を抜け市街地へと戻る。とりあえず大聖堂にいるハクアと合流しなくてはならない。

「思ったより早く済んだな。さて、この後どうするか」

「……アクセル、帰りは陸路に」

「船だ。が、次の船が来るまでしばらく時間がある。ハクアと合流して、少し街の見物でもしていくか」

「やっぱ船か、船なのか……っ。そうそう、これをメルフィナから預かってたんだけど」

「何だ？」

キリヤはポケットの中から、今朝の出発の際にこっそりと手渡された紙を取り出す。折りたたまれたそれを広げると、そこには何十種類にもおよぶ食料の名前が書き連ねられていた。せっかく王都まで出向くのだから、その市場で珍しい食材を買い漁ってこいという意図はすぐに読み取れた。しかし

「……何だ、この量は」

「……ふざけてやがる。こんな量、俺とアクセルだけじゃ持ち切れないぞ」

荷物持ちの人数にハクアを数えるわけにはいかない。となると二人がかりで荷物を運ぶわけになるのだが、とてもじゃないが持ち切れる量ではない。というか、これは一体何人分の食料になるのだろうか。そこまで考えたところで、どうせメルフィネのことだからここにある食材を一日で食い散らかすくらいの自信はあるのだろうと勝手に納得してしまった。それはそれで恐ろしいことだが、買い物忘れて八つ当たりを浴びるのもそれはそれで恐ろしい。

「……まあいい。いくつかはすでに売り切れていたことにしよう。半分も買い込めば十分だろう。というか、そこまで余分な持ち合わせなんてないしな」

「金も渡さずにこんだけ買ってこいとか、何なんだあいつは……」

言いたいことは山ほどあるが、とりあえずそれは置いておく。大聖堂へ向かう道の途中、すでに付かれきった様子の二人の足取りはどこか重い。

聖リリアネス大聖堂。

大陸で最大の規模を誇る聖堂で、日を問わずに各地からの巡礼者や参拝客で賑わう場所だ。王都の観光名所の一つとしても有名であり、希望者がいれば聖堂所属の聖職者が歴史や文化などに関して説

明もしてくれる。内部には聖堂の他にも多くの蔵書を保管、管理する大図書館があり、これは関係者の間ではライブラリと呼ばれている。多くの書物は一般の人間でも手に取ることはできるが、図書館の利用には聖堂関係者の許可が必要だ。また、一部の書物は特別な許可が下りない限り開示できない決まりとなっている。

キリヤとアクセルの二人が大聖堂に到着すると、すぐにハクアの姿を見つけることができた。ハクアは聖堂前の並んだベンチの一つに腰掛け、何やら本のようなものに目を通してている。

「……あ、キリヤ！ アクセルさん！」

二人の姿に気が付いたのが、ハクアは読みかけの本を閉じ立ち上がる。

「遅くなってすまない」

「何読んでるんだ？」

「あ、これ？ 大聖堂の人にもらった、世界の成り立ちとか歴史について書かれてる本だよ」

要するに布教用の本ということだろうか。まあ、大聖堂にしろ修道院にしろ教会にしろ、その運営をまかなう資金の大半は信者からの献金という形でまかなわれているのだから、そちら側としては一人でも多く信者を増やしたいという気持ちは分かる気がする。

「用事はもういいんですか？」

「ああ、無事に終わったよ」

「何のお話だったんですか？」

「……ま、色々とな」

わざわざアクセルが気を使ってくれたのに、ここで馬鹿正直に本当のことを言うこともない。キリヤは適当に茶を濁し、その話題から遠ざかることにする。

「それより、帰りの船まで時間があるからもう少し王都の中を見ていかないか？」

「いいんですか？」

「あまり長々とはいかないがね。ハクアはどこか、見ておきたい場所とかはあるか？」

「えっと……すみません。何がどこにあるかもさっぱりなので」

「分かった。じゃあ、来るときに歩いた通りとは別の通りを歩いて、色々見て廻るとしよう」

三人は揃って歩き出す。大聖堂前の広場は大々的に開放されており、先ほどのハクアのように備え付けられたベンチなどでこそを休める人の姿も少なくない。それ以上に参拝客が多いので、自然と雑踏ができてしまう。が、混雑というほどでもないので歩くのに不自由はしない。人の間を抜け、三人は表通りから一つ外れた通りを歩き始めた。直後に

数人分の悲鳴と、爆発音が鳴り響いた。

「きゃあああつ！」

「おい、何があった!？」

「見て! 煙が上がってるわ!」

「広場の石像が壊れたらしいぞ」

「爆弾か!？」

などなど、一瞬の静寂の後にそんな声が口々に聞こえたかと思えば、広場はすぐに騒がしくなった。慌てふためく者、驚きのあまり腰を抜かしてしまう者、野次馬として群がる者など様々だ。

「キリヤ、ハクアを連れてここを離れている」

「お、おい! アクセル!」

「アクセルさん!？」

それだけ言い残し、アクセルは真つ先に大聖堂へと走っていった。

「くそ! 俺達も行くぞ、ハクア!」

「う、うん!」

結局残された二人も同じように走り出していた。目の前では灰色の煙がもうもうと立ち上っている。空の青さとは不釣り合いなその色

が、何かしらの不安を予感させているようだった。

第十一話 盗人

聖堂前の広場は野次馬で溢れ返っていた。爆発音を聞いてすぐに走り出したアクセルだったが、思った以上に多い野次馬に思うように前に進めず、なかなか現場へと駆けつけることができないでいた。「すまない！ 通してくれ！」

どうにかこうにか広場の前までやってくると、まず目に飛び込んできたのは粉々に砕け散った石像の姿だった。土台の部分だけは無事であるが、それ以外のところは吹き飛ばされている。もとは聖母の石像だったはずだが、これでは目も当てられない。

「怪我人はいませんか？」

「あ……は、はい。大丈夫のようです。飛散した欠片でかすり傷を負った者が数名いますが、それ以外は……」

その場にいたシスターの一人に声をかけるとそんな答えが返ってきた。不幸中の幸いか、爆発による死者や大怪我をした者はいないようだ。アクセルはわずかに胸を撫で下ろす。そのときだ。

「道を開けてくれ！ 騎士団の調査隊だ！」

雑踏の向こう側からそんな声が聞こえてきた。するとすぐに人ごみの間に道が割れ、その向こうから数名の騎士と共にグレンが姿を現した。

「グレン殿」

「アクセル？ お前、どうしてこんなところにいる？」

「連れと待ち合わせをしていました。無事に合流し、この場を去ろうと思った矢先のことです。爆音のようなものが響き、どうやらこの石像が破壊されたようです」

「ふむ……」

そこで一度グレンは視線をはずし、すでに木っ端微塵になってしまった無残な石像へと目を移す。その周囲には石像のものであろう

破片があちこちに飛び散り、大小無数の石ころが転がっていた。

「……………怪我人は？」

「死者や重傷者はいないようです。それだけは不幸中の幸いでしたが……………」

「……………そうか。確かにそれは幸いではあったが、さて……………」

まだ何か言いたそうなグレンではあったが、とりあえずこの場は言葉を引っ込めておくことにした。それよりもまずはやる必要がある。

「お前達は怪我人を運びしだい、騎士団本部に通達しろ。不穏な輩が王都の中に紛れ込んでいる可能性がある。厳重に警戒し、巡回を増やすようにとな。不審者を見つけたらすぐに俺まで知らせろ」

「はっ！」

言われ、数名の騎士達が急ぎ足で騎士団本部のある方へと走り去っていく。その背中を見送ったところで、グレンは再び何か言いたそうな表情に戻る。

「アクセル！」

「アクセルさん！」

その思考を打ち切らせたのは、キリヤとハクアの声だった。人ごみの向こうから二人が駆け寄ってきているのを見て、アクセルはわずかに驚く。

「二人とも、すぐにこの場を離れると言っただろう！？」

「何言っただよ。後先考えずにいきなり走り出したのはアクセルの方だろ」

「アクセルさん、一体何があったんですか？ さっきの、爆発の音みたいなのは……………」

「案ずるな。お前達が心配する必要はない」

「グレン、さん？」

「え……………キリヤ、知ってる人？」

「ああ。騎士団長のグレンさん。さっきまで俺とアクセルが会って

「ただよ」

「そうか、二人の連れとはこの子のことか。俺はグレン。聞いての通り、騎士団長を務めている者だ」

「は、はじめまして。私、ハクアです」

「丁寧な自己紹介のところ悪いが、話を続けさせてもらおう。この件に関しては騎士団が調査を開始する。間もなくこの場合は騎士団の管轄に入り、一般人の出入は厳しき制限させてもらうことになる。そうなる前に、お前達は王都を離れた方がいいだろう」

「けど……」

「キリヤもハクアも、グレン殿の言うとおりにするんだ」

「でも、アクセルさんは？」

「こんなことがあったんだ。俺とて騎士団の一員として、真相を探る義務がある。残念だが一緒に帰ることはできそうにないな。船の時間になったら、一足先に二人でジェリオの街に戻ってくれ。それと、ギルドの皆に伝えてほしい。急用ができたから、数日は王都に滞在するとな」

「だったら、俺も」

「言いかけて、キリヤは思い出す。ほんの少し前に、自らの騎士見習いの称号は剥奪されているということに。今の自分はここに残ってアクセルを手伝うことはできないということを。」

「く、そ……！」

「……キリヤ、ハクアを頼む」

「……分かった。アクセルも、あんま無理すんなよ」

「ああ、分かっている」

「行こう、ハクア」

「あ、待ってよキリヤ」

先に歩き出すキリヤを追いかけ、ハクアもそれに続く。二人のその背中が小さくなるまで、アクセルはその場を動かずに見送った。

「思ったよりは聞き分けはいいようだな。キリヤのことだ、食いつ

いてでもこの場に残ると言い張ると思っただぞ」

「普段のあいつなら、そうしたでしょう。グレン殿のおかげかもしれません」

「俺のいる手前、無茶をできなかったと？」

「それも少しはあるかもしれませんが……それ以上に、先ほどのグレン殿との会話が、あいつを踏み止まらせたんだと思います。自分の我侭一つで、周りを巻き込む可能性があるということ、あいつは知ったんだと思います」

「ふむ。だが、どうやらそれだけではないようだかな」

「……あいつにも、一つくらいあった方がいいんです。守りたいと思うものが。心の底から大切だと思えるくらいの何かが、一つくらいはあった方が」

「なるほどな。そういうお前はどうかんだ、アクセル？」

「私、ですか？ そうですね……」

少しだけ考えて、アクセルは口を開く。まるで、考える必要なんてなかったかのように。

「沢山ありますね。少なくとも、この両腕には抱えきれないくらいには」

「そうか。奇遇だな、俺もだ」

それだけ言っただけで、グレンはどこか満足そうに笑った。だが、その笑みも一瞬だ。表情はすぐに厳しさに戻り、これからはすべきことを真つ直ぐに見据えた目つきへと戻る。だが、今はまだその時間じやない。動くのは、日が暮れて夜があたりになり満ちた頃からだ。

聖リリアネス大聖堂の奥には、地下に通じる隠し通路がある。この存在を知っているのは王族の中でもごく一部で、それを除けば大聖堂の最高責任者と一部の限られた者達だけだ。どうしてそんなものが大聖堂の中にあるかと聞かれれば、答えは実に簡単だ。隠す必

要のあるものが、その場所には眠っているからに他ならない。しかもそれは、個人の秘密程度のものではない。一つの国が、国家が丸となってまでひたむきに隠し続けなければならない、それだけの理由があるからだ。それがどんなものであるにしても、価値のないものであるはずがない。盗む理由としてはそれだけで十分だった。

かつんかつんと足音がこだまする。大聖堂の地下、隠し通路の中は下りの螺旋階段になっていた。深く深く、地の底の底まで繋がっているかのような石段を、一人の人影が進んでいく。その手にはラントンの明かりが握られており、身に着けた真っ黒なフードとマントが壁の影の中でゆったりと揺れている。

「……………」
顔はフードに隠れて見えず、体格もマントのせいではつきりしない。男なのか女なのか、子供なのか大人なのか、それさえもこの暗闇の中では区別できなかった。

やがて、長かった階段が終わる。その人物の前に現れたのは、古い石造りの扉だった。表面には何やら文字が刻まれているようだが、ところどころが崩れてしまっていて読むことができない。それ以前に使われている文字が古い時代のもので、そっち方面の知識がない人物にとっては何が何だかさっぱりだ。

が、構わずその人物は扉を押した。すると、ずらずと地面を引きずりながらも、扉はゆっくりと押し開けられていく。体を通り抜けられるだけの隙間を確保すると、その人物は静かに中へと歩を進めていく。当然のように暗闇が広がっているはずだったが、一ヶ所だけ他とは違う場所があった。そこがこの地下の部屋のどの部分に当たるのかは分からない。が、確かにその一点だけが光っていた。青白い、神秘的な光を放って揺らめいていた。

「……………」
見つけた。これが……………」

その人物は小声で呟く。若い声だった。だが、それだけではまだ

男とも女とも判断しがたい。構わずその人物は光の場所へと向かう。
「……間違いない。これさえあれば……」

目的のものを目の前にして、その人物はわずかに笑みを浮かべる。闇の中ではあるが、青白い光を放つその前で、口元は確かに微笑みの形を作っていた。だからだろう。今の今まで張り巡らせていた、警戒の糸がわずかに緩んだ。気付いた瞬間には、すでに遅かった。
「っ!?!」

その人物は背後を振り返る。いつのまにか光源が増えていた。それも、一つや二つではない。松明の明かりは後から後から増え、唯一の入り口だった石の扉の前は完全に塞がれてしまった。

「騎士団か……!」

忌々しそうな声で呟く。対して、入り口を完全に封鎖した側は静かに告げる。

「まんまとかかったな。まさに袋のねずみというやつだが、どうする？ まだ抵抗は残されているわけだが」

そこまで言って、鞘の中から剣が抜かれる音が響いた。松明の明かりに照らされた中、白銀の大剣がよりいっそう輝きを増して赤く映えた。

「無駄な抵抗と知ってなお抗うというのなら、止めはせん。相手になるぞ」

グレンは真つ直ぐに剣を構えてそう告げた。逃がしはしないと、その表情が物語っている。対して、黒い衣装に身をまとった人物はゆっくりと振り返る。そして、静かにそのフードを取り払った。グレンの表情が、わずかに固まった。

第十二話 地下聖堂の戦い

フードから覗いた顔は女のものだった。薄暗い地下で髪の色ははつきりとは分らないが、おそらくは黒。短めに切り揃えられた感じから男のようにも見える。黒い瞳は暗闇の中で深く染まり、底知れぬ闇を思わせる。その視線は鋭く、真っ直ぐに正面で大剣を構えたグレンを睨みつけていた。外見からして、まだ幼さを残すような年齢だというのに。

「女の盗人か。悪いが、老若男女で加減をしてやるつもりはない。大人しく投降するというのなら話は別だが、どうやらその気はさらさらなようだしな」

「よく分かっているじゃない。そこまで分かっているなら、私がどれだけこれを欲しがっているかも分かるでしょ？ 黙って見逃してくれないかしら？」

女の声は、やはり外見同様にまだどこかしらに幼さを残す声色だった。が、これだけ緊迫した場面に立たされていてなお、その口調に焦りや恐怖といったものは微塵も感じさせない。多対一であるこの状況でありながら、無事に逃げおおせられる自信があるのか、それともまだ何か奥の手のようなものを隠し持っているのか。どちらにしても油断はできない。グレンは構える大剣を握る手に、わずかに力を込めた。

「口で言っても無駄のようだな。ならば、力づくでも縄についてもらうぞ。不可侵の領域に踏み込んだ罪、己が身をもって知るがいい」

グレンは大剣の切っ先を女へと向ける。じりじりと足をずらしながら、飛び込むその一瞬のタイミングを計る。倣って、対峙する女もわずかに体勢を低く構えて対応の動きを見せる。それが迎撃のものなのか、それとも退避のものなのか。細かいことはどちらでも良かった。この場所まで無断で入り込んだ時点で、それは立派な罪人

だ。

「はあっ！」

「っ！」

直後にグレンが一足飛びで間合いを詰めた。その大柄な体軀からは想像もできないほどに俊敏な動きだ。大剣を水平に構え、一気に横薙ぎの一撃を振り抜く。その斬撃の間合いは軽く女の二倍以上はある。同じタイミングで後方へ飛んだところで、その間合いからは逃れられない。そして、予定調和のように剣先が女の腹部を両断した。

時間は少し遡る。

「……いいのか？ お前は先に帰っても良かったんだぞ」

「でも、私もアクセルさんのことが心配だから……」

そんな会話をしているキリヤとハクアは、会話の内容から察するとおりジェリオの街には戻っていない。二人が今いるのは、大聖堂の裏手にある木陰だ。表の通りはすっかり騎士団によって立入禁止になっており、こつち側からでしか近づくことができないからだ。

二人がジェリオの街に帰らずにこうしている理由は、非常に分かりやすい。要するに、仲間が心配だったからだ。とはいえ

「……なかなか動かないな」

「もう、だいぶ暗くなってきたね……」

かれこれこうして三十分近く機を伺っているのだが、警備の騎士達はなかなか隙を見せてくれない。交替の時間があるはずだから、そこならうまく大聖堂の中へ忍び込めると踏んだまでは良かったのだが……。

「ねえ、キリヤ」

「何だ？」

「どうして、アクセルさんやグレンさんが大聖堂の中にいると思う

の？」

「立入禁止にするだけなら、こんなに嚴重に警戒する必要なんてない。ましてや二十四時間態勢で見張りをつけるなんて、よほどここから人を遠ざけたいってことだろ」

「それはそうかもしれないけど……」

「……他にも、気になってることはある」

「え？」

ハクアがもう一度聞こうと思ったところで、キリヤが手で制した。見ると、見張りの兵士が動き出したところだった。おそらく交替の時間になったのだらう。今なら物陰を伝って大聖堂の中まで踏み入ることができる。

「本当についてくるのか？」

「うん。私だって、同じギルドの仲間だよ」

「……分かった。けど、絶対に無理すんな。やばいと思ったら一人でも逃げる。それだけ約束しろ」

「うん」

「よし。行くぞ」

そうして二人は障害物を盾に、静かに大聖堂の中へと入り込む。中は真つ暗で、頼りになりそうな明かりは何一つない。暗がりの中を手探りで、少しずつ進んでいく。通路を挟むようにいくつかの扉が連なっており、その中を一つ一つ確認していく。休憩室、倉庫、空き部屋、そして図書館。最後に辿り着いた図書館の中、本棚の間を縫うように歩く。端から端まで歩いた先に、管理室の扉があった。その扉を静かに押し開ける。中にはこれといって特別なものは何もない。が、暗がりの中でもそれはほどなくして見つかった。

「ここみただいな」

「階段……？」

おそらくは閉め忘れたのだらう、机の下に地下に通じる階段が微かに顔を覗かせていた。その奥からは、何かこう言葉ではうまく表

現できない不安のような何かが流れ出している気がした。何かあるとすれば、この先に違いない。

「行くぞ」

「う、うん……」

二人は一歩ずつ、地下の闇へと誘われるように進んでいく。

鮮血が飛び散る……はずだった。グレンの大剣が、女の体を横に一刀両断していれば、間違いなくそうなるはずだった。そうならないということとは、理由は一つしかない。

「……防いだか」

わずかに眉根を寄せ、グレンは呟く。グレンの大剣と女の体。その間に、もう一つ銀色に輝く刀身を持つ短剣が盾にされていた。ガギンと、今頃になって刃同士が響き合う音がする。グレンの一撃をその短剣で防いだ女は、そのままその勢いに逆らわずに横方向へと飛ばされる。中空で一回転すると、そのまま足から着地して事なきを得る。当然、その体には傷一つない。

「見事。その短剣で俺の一撃を完璧に受け流すとはな」

「見かけだけじゃなく、本当に馬鹿力ね。剣を握る手の方が痺れて使い物にならないわ」

グレンの言葉を女は軽く受け流す。が、グレンのその言葉はふざけているわけではなく本音そのものだ。確実に仕留めたと思えた一撃だったが、いとも簡単に受け流された。確かに殺すつもりで振った剣かと聞かれればそれは違う。だが、身動きができなくなる程度には威力を調整した一撃ではある。それをあっさりと受け止められたのは驚嘆だし、同時に警戒に値する。

「その身のこなしといい、ただの金目当ての盗人というわけではなさそうだな」

「正直に素性を明かせば見逃してくれるの？ 騎士の名にかけてそ

う約束してくれるのなら、こちらとしては願ったりなんだけど」

「できぬ相談だ」

「ですよ。んじゃ、こっちも生き残るために全力を出さないと。こっちも奪い返されるわけにはいかないから」

女の手の中にあるのは、青白い光を放つ石のようなものだった。手のひらにちょうど収まるほどの大きさのそれは、女の手に渡る前にはこの地下の中央に位置する台座のようなものの上に置かれていた。安置というにはずさんすぎる管理体制だ。それとも他に何か理由があるのか。少なくとも、この女はグレン達よりは詳しくその意味を知っていることは間違いないさそうだ。

「返してもらうぞ。それがどのような代物で、どのような用途があり、いかなる理由でこの場所に収められていたかは俺にも分からん。だが、みすみす奪われることだけはできぬのでな。悪いが、全力で行く。死んでも恨むなよ、盗賊」

「盗賊って部分は否定しないけど……何か、代名詞で呼ばれるのはしっくりこないわね。一応、リズって名前があるんだけど」

「そうか。ではリズよ、覚悟はいいか？」

「名前を覚えられて最初の言葉がそれっていうのもちよつとあれだけど……まあ、仕方ないよね。それがあなたの仕事なんですよ、騎士団長さん」

「グレンだ。次は仕留める」

「あなたがそうあるように、私にもなすべきことがある。悪いけど、こんなところでは死ねないわ」

直後に、二人は同時に動いた。一撃目同様、一足飛びでリズの懐へと飛び込むグレン。両手で大剣を振るうが、やはりそこに明確な殺意はない。気を失わせる程度に威力を落とした一撃だ。甘いといわれるかもしれないが、グレンは無駄な血を流すことを好まない。それにまだ、リズには聞きたいことがある。対してりずは、選択肢

など最初からなかった。この場を生きて切り抜けるには、とりあえず目の前のグレンを退けなくてはならない。そのためには、手段を選んでいる暇はなかった。例えその結果、他の全てを巻き込むことになったとしても。

「はあああつ！」

「……悪いね。こつちにも、引けない理由つてのがあるんだ」

そう小さく呟いたリズの声は、ひどく悲しげだった。好きでこんなことをやっているんじゃない。できることならこんなことなんてしたくない。まるでそう呟いているかのようだった。だが、しかし「っ！？」

「防ぎきれる？」

グレンが齒噛みするのと、リズが悲しそうに微笑んだのはほぼ同時だった。リズは懐から取り出したそれを、まるで小石を放り投げるようにしてグレンへと向けた。黒い球体のそれは、表面に無数のひびが刻み込まれたように赤い線が複雑に絡まっている。冷静に分析などする時間はない。刹那の中、グレンの脳裏をよぎる一つの言葉。それは、爆弾。

「伏せるおおおおつ！」

それは遙か後方で待機している、騎士達に向けて放たれた言葉。リズの姿はすでに正面にはない。遙か後方に飛び退き、物陰にその身を隠している。目の前に放り出された黒い球体を、グレンは大剣の腹で上方向へと打ち上げた。赤いひびが輝きを増した。直後に、それは爆発した。地下全体を大きく震わせる爆音と共に。地下の世界は一瞬だけ眩いほどの閃光に包まれ、再び静寂の中へと返っていく。身動きのない人影を、いくつも抱いたまま。

第十三話 狂った予定

地震が起きた。と、多くの人々はそう思ったはずだ。揺れていた時間は短い、足元から何の予兆もなしに訪れたそれに、誰もが少なからず驚きを隠せないでいる。しかも時間はもう夜中だ。慌てて起きてベッドから転げ落ちた人だって何人かいるかもしれない。それでも、揺れさえ収まってしまえば全ては過ぎたことになる。夢の途中で叩き起こされた人々は、再び夢の中へと戻っていくのだろう。夢の続きを見れるかどうかは別として。

粉塵が舞い上がっている。ぱらぱらと音を立てているのは、剥がれ落ちた壁の一部や砕け散った床の一部がそこらじゅうに飛散して転がる音だろう。もうもうと立ち込める砂煙の中、もぞりと動く影が一つ。白煙に包まれてはつきりとは見えないが、そのシルエットは細身の女のものだ。

「……さすがに、ちよつとやりすぎたかな」

そう言いながら立ち上がるリスは、左の二の腕の辺りを右手で押さえている。見ると、指と指の隙間からはわずかだが血が滲んでいる。爆発の余波から身を守るために物陰に隠れ、体勢も地を這う獣のように低くして身構えたが、それでも全くの無傷というわけにはいかなかったようだ。が、傷自体は浅い。これから逃げ出すには十分な体力も残っている。特筆するような問題は何も無い。

「ていうか、出口は大丈夫？ 馬鹿だな私、そっちのことまで頭が回ってなかった……」

これで出口までが瓦礫の山で埋もれていたならそれこそお手上げだ。そうはなりませんようにと、がらにもなく祈りながらリスは出口のほうへと視線を移す。ゆっくりとだが、視界を覆っていた砂煙の壁

が晴れていく。向こう側にぽっかりと、穴のようなものが見えた。どうやら出口は無事のようなので、リズはほっと胸を撫で下ろした。その穴のように見えた何かが、ごぞりと動き出すまでは。

「っ!?!」

「……………さすがに今のは驚かされたぞ。全く、加減を知らぬやつよ」

砂煙の向こうからそんな声が聞こえた。聞き覚えはある。ほんの少し前まで、互いに命がけの戦いに身を投じていたのだ。忘れるわけがない。それでも気のせいだと思いたかった。だが、空耳にしてはやけにはつきりしている。夢や幻の一言では片付けさせてくれそうにない、力強い声だ。淡い期待をリズは捨てた。その頬を冷や汗のような何かが伝って落ちた。

「……………とはいえ、こちらは無傷では済まなかったか。もつとも、お前とて似たようなものだがな」

「……………驚くを通り越して呆れたわ。あなた、あの一瞬の中でとんでもないことをやってのけてくれたのね」

「部下を守るの俺の務めなのでな。俺の戦の中では、誰一人として無駄死にはさせんと決めている」

グレンもリズ同様、左腕を負傷していた。だが、その度合いはリズの比ではない。鋭い石の破片が数箇所突き刺さり、流れ出る血はその左腕の全てを真っ赤に染め上げていた。骨折こそしていないようだが、文字通りこれで左腕は使い物にならないだろう。それでいて顔色一つ変えずにこうしていられるのは痩せ我慢か。それとも片腕だけでも十分だといわんばかりの余裕なのか。そしてグレンの背後には、多くの騎士達が爆発の衝撃で吹き飛ばされたのだろう、気を失って倒れている。だが、彼らの体に傷はない。ただの一つさえ、ない。

「……………爆発の衝撃、その余波、それに伴う瓦礫の雨と暴風の嵐。そ

の全てから、全ての部下を守り切ったっていうの……？」

「さて、どうだかな。生憎と図体がでかいものでな。知らぬうちに壁となっていただけかもしれん」

軽い調子で答えるグレンは、満足に動く右腕の中で再び剣を握り締めた。まだ戦いは終わっていないという合図に他ならない。切っ先を真っ直ぐにリスへと突きつけ、戦う意志を表す。

「お喋りが過ぎたな。では、そろそろ幕間は終わるとしよう。出口は俺の背後。俺を倒せば無事に逃げおおせられるぞ。もっとも、今の爆音を聞いて黙っているほど、俺の部下は愚かではないがな」

それはつまり、すぐにも増援がやってくるということ。長引けば長引くほど逃げ場は失われていく。もう一度爆弾を使ってこの場を切り抜けることも不可能ではないが、あまりにリスクが多すぎる。今度こそはかすり傷程度では済まされない。

「……参ったわね。ほんと、お手上げね」

「……………」

それは降参という意味なのか。確かに、目の前のリスからは戦意が失われつつあるのをグレンは感じていた。いや、それをいうならリスにも最初から殺意はなかった。もしも手段を選ばずにこの場を切り抜けようと思ったなら、他にやりようはいくらでもあったはずだ。だからその言葉は、ある意味では間違いなくリス自身の本音だったのだろう。ただ一つ、間違いだったのは

「まさか、こんなやつの手を借りることになるなんて」

明確な殺意を持つもう一人が、この場にやってきていたということだ。

「っ！？」

不意の殺気だった。グレンは反射的にリスから視線を百八十度移し、背後を振り返る。そこに

「 さようなら、誇り高き騎士の長。最後はどうか、その身を焦がす思いで天へとお還り」

炎があつた。太陽を圧縮して圧縮して手のひらに収まる大きさまで縮めたような、炎の球が。

「な……魔術、だと……!?」

「最後の言葉にしては、些か物足りないかもね」

直後に、炎が放たれた。ほとんど密着に近い距離。回避も防御も間に合わない。直撃は絶命を意味する。炎が迫る。体は動かない。炎が迫る。剣では抗えない。炎が迫る。どうすれば、いい？

「ぐ……っ！」

グレンは目を閉じなかつた。何もかもが終わつたと思つた。数秒後には、きつとまともな結末なんて用意されていない。油断した自分を呪う言葉も出てこなかつた。もう一度リズを振り返ることもなかつた。単純に終わつたと思つた。何もかもが。そんな理不尽を不思議と受け入れてしまう自分が、確かにそこにいた。しかし

「っ!？」

まず感じたのは衝撃。炎の球によるものではない。一瞬遅れて、それが横合いから誰かに飛びつかれたのだと理解した。体が倒れる。目の前に迫っていた炎の球が、体を逸れて飛んでいく。驚いたような男の顔が視界の端に映つた。炎を放つた男の姿だつた。まだ若い。おそらくは二十代半ばくらいだろう。そんなことをいちいち冷静に考えられるくらいには頭が冷えていた。

「ぐ、ぬ……?」

上体を起こす。ほとんどしがみつくようにして、そこに一人の少年がいた。見覚えはある。だが、同時に信じられなかつた。なぜ、この少年が……キリヤが、ここにいるのか？

「キリヤ、お前……」

「っ、グレンさん、大丈夫……ですか？」

「あ、ああ……だが、お前どうして」

「話は後にしてください！ とにかく今は、止血を」

「少し、痛むかもしれませんけど……」

「君まで……」

気が付くと、グレンの横にはハクアの姿があつた。荷物の中から取り出した布を使い、グレンの左腕の傷口を強めに縛る。すでに出血そのものはだいぶ収まっていたが、それでも流れた血の量は少なくない。その証拠に、立ち上がるうとしたグレンの体がわずかに揺れる。軽い貧血を起こしているのだ。

「……お前ら、何者だ。何の理由でこんなことをしてる」

「……援軍も間に合っちゃったか。ああもう、完全に予定が狂っちゃった。こんなやつの手まで借りたっていうのに……最悪」

「命の恩人に対してそれはどうかと思うのだが。それに、まだ形勢は逆転とまでは言いがたい。増援とはいっても、子供一人増えただけだろう」

「そりゃそうなんだけどね。何ていうか、もう色々とぐだぐだでわーって感じ？」

「私に言うな。元を正せば君の力量不足が招いた結果だろう」

協調性の欠片も見せない味方にリズは呆れる。だが、確かにその通りだ。戦況はまだ覆せる。そうである以上、やるしかない。ただ、その前に聞いておきたいことがある。

「ところで、増援ってことはあなたも騎士なの？」

キリヤの外見を気にしての問いだった。馬鹿正直に答えてやる義理もなかったが、気がついたら口は動いていた。

「そうなる予定だ。覚えとけ」

第十四話 敗北感

戦況は一変していた。どちらかに有利不利が傾いたわけではないが、何だかおかしなことになっているのは認めざるをえない。

「それで、その騎士予定のあなたはどうするつもり？」

リズは問う。隣に控えた男も、口には出さないが同じ視線でキリヤを見据えている。戦力として数えられるのはもはやキリヤだけで、負傷しているグレンは数には入らない。その手当てをしているハクアなどは論外だ。

「頭数で見れば、こっちは二人でそっちは一人。さすがにこちらに分があると思うんだけど？」

「そんなことは言われなくて分かってる。けど、それではいそうですかって道を開けられるわけねえだろ」

「騎士道というものか。だが、目の前の状況を正確に推し量れないようでは未来はないだろう。この期に及んで我々と交戦することが、そちらにとって最良の選択肢であるとは思えないのだが？」

気を失った多くの騎士達は未だ目覚めない。加えて言うのなら、この地下空間もいつまで今の状態を保っていられるかどうかも定かではなかった。どれだけ頑丈な造りをしているかは知らないが、爆発の影響で壁や天井に深刻なダメージが行き渡っているかもしれない。もしも天井が崩れ落ちるようなことがあれば、この場にいる誰一人として無事で済むはずがない。

「それはお互い様だろ。お前らだって、ここから早く離れたいはずだ。もしも命をかけることになっても、その手の中の石を手放さずにいられるのか？」

「さあ、どうかしらね。けど、私はこんなところでくたばるつもりなんてこれっぽっちもないわ。横のこいつはどうか知らないけど」「助けてもらっておいてひどい言われようだな。別に私だって、好

き好んでこんなところで君と運命を共にしているわけではない。価値のない死など、私がつとも嫌うものだ。よって、私はこんなところで死んでやるつもりはない。隣の世界はどうかは知らんがね」

「あんだ、何しにきたの？」

「そういう君は何をもたついている。この地下聖堂から水路に繋がっている隠し通路の場所は、事前に教えておいただろう」

「……隠し通路？ そんなものが……」

二人の会話を聞いていたグレンが思わず聞き返す。しまったという表情がリズの顔に出た。

「ちょ、あんだ何考えてんの！？ そんな大事なこと、敵の目の前で言うわけ？」

「そんな大事なことを君は忘れていたのだろう？ 全く、何のために下調べをしたと思ってるのやら……」

男は呆れた様子で首を左右に振る。リズは今にも男に掴みかかりそうに、右手をわなわなと震わせているが、男はそんなことにはお構いなしだ。溜め息混じりに愚痴を繰り返していたが

「っ！？」

その余裕は不意に奪われる。剣を構えたキリヤが間合いに踏み込み、一撃を見舞ったからだ。縦に振りかざされた斬撃は、しかし男の体を切りつけるには至らなかった。振り下ろしたその軌跡はちょうど、リズと男とを二分するかのよう空を切る。キリヤは空振りに構わず、そのまま二撃目を繰り返す。切っ先はリズへ向いていた。

「馬鹿話ばっか繰り返してんじゃねえ！」

「私のせいじゃないわよ！」

すぐさま言い返すリズだったが、キリヤはお構いなしだ。剣を振るう手を休めることはしない。一方リズも、握った短剣でその一撃一撃を受け止めては弾いていく。互いの武器がぶつかり合う金属音が残響し、目に見える小さな火花が飛び散った。

「くっ……!」

「まだまだ!」

攻め続けるキリヤに対して、リズは防戦一方だった。傷を負った左腕がずきずきと痛む。実質片腕だけで防御に専念する必要があるわけだが、いかんせん長剣による一撃は重い。近接戦闘では小回りがきく分、短剣の方が優れている部分も多くある。あるのだが、それも満足に両腕で攻防をできるのが前提だ。負傷した左腕を引きずって互角で打ち合えるだけ、もはや僥倖ですらある。

「しっつ、こいなあ!」

リズは小さく叫び、斬撃を受けた短剣をそのままスライドさせ、切っ先をキリヤの剣の柄近くまで走らせた。がぎぎぎという擦れる音と、いくつもの火花が飛び散る。そのまま勢いを殺さずに、一気に短剣を振り抜く。その軌道の先にはキリヤの右肩がある。利き腕の基点を潰すつもりだ。だが、それはかなわない。

「……っ?」

「え……?」

打ち合う二人の間を、突風が通過した。突然の出来事に攻撃に転じたリズばかりでなく、受けに回ったキリヤまでもがそんな声を漏らす。

「油断するな、キリヤ!」

グレンの声だった。見ると、大剣を振り抜いた構えのまま立ち尽くしている。今通り過ぎた突風は、その大剣を振り下ろしたことによって生まれたもののようにだ。十メートル以上の距離を、あれだけの威力を保ったまま放たれた剣圧。それも、負傷した片腕だけの力で。

「は、はい!」

「っ、いよいよ雲行きが怪しくなってきたわね。早いとこ離脱しないと……ねっ!」

言つと、リズは横合いに大きく跳躍した。キリヤがその動きを目で追い、続けて体で追いかけてしようとした瞬間、背後から何かが迫っている感覚を覚えた。熱を感じる。反射的にリズとは反対方向に大きく跳ぶ。その直後に、炎の球が通り過ぎていった。あと少し反応が遅ければ、火傷程度の話では済まないことになっていただろう。

「くそ……！」

詰めていた間合いを大きく離され、キリヤが舌打ちする。後ろを振り返ると、男がその両手で炎の球を弄んでいた。どうやら本当に魔術を使っているようだ。

「あつぶないでしょ！ もうちょっとで私まで丸こげになるとこだったじゃない！」

「いくら君でも、あの程度の速度の炎なら十分回避できるだろう。それに、もとより君を狙ったわけでも彼を狙ったわけでもない」

その言葉の意味するところは、すぐに理解できた。どこんという音が響き、壁が砕ける音がした。先ほどのように粉塵が舞い上がり、わずかに視界を奪っていく。そして、その先に

「あれは……」

「退路は確保した。そろそろ引き上げるとしようじゃないか」

穴が開いていた。キリヤが回避した炎の球が、そのまま直進して壁に直撃したのだ。その壁の向こうに、ぽっかりと穴が開いている。その奥には道が続いているように見える。

「ぐずぐずするな。行くぞ」

「ああもう！ 何であんたに指図されなくちゃいけないのよ！」

ぶつぶつ言いながらも二人の行動は早かった。迷いなく真っ直ぐに開いた穴まで走っていく。このままでは確実に逃げられる。

「逃がすか！」

すぐにキリヤも追いかける。が、その追跡も炎の球によって阻まれた。おそらく命中させるつもりはないのだろう、いくつかばら撒かれるような具合に炎が飛来する。だがそれでも、走る足を止める

には十分だった。

「くそ……待て！」

「待てといわれて待つやつがいるとでも？」

「そういうわけだから、これはもらっていくわね。できるなら、もう二度と会わないことを祈るわ」

それだけを言い残し、二人分の人影が穴の向こう側へと消えていく。

「待て！」

「キリヤ、深追いするな！」

その声にキリヤの足が止まる。振り返ると、ちょうど入り口のところにあくセルの姿があった。他にも数人の騎士達と一緒に、気が失った騎士達の救助に当たっている様子だ。

「あくセル……」

「お前の言いたいことは分かる。だが、今はまず負傷者を運ぶことの方が先決だ。グレン殿の傷も、決して浅いものではない」

「く……！」

「……悔しいだろうが、今は引くんだ。深追いしたところで、やつらを抑えられる確証はない」

「……分かったよ」

キリヤは剣を納め、あくセルの元へと急ぐ。倒れていた騎士達の何人かは意識を取り戻したようで、自分で歩ける者は自分の足で、そうでないものは仲間の肩を借りて地上への階段を上り始めた。事実上の敗北だった。盗賊の侵入を許し、何かを奪われた。その何かに関しては、詳しいことは何も分からない。分かったのは、それが青白い光を放つ石のようなものであるということだけだ。それを奪って逃げたあの二人の目的も、闇の中に葬られた。去り際のセリフのように、もう二度と会うことはないかもしれない。

「無事か、キリヤ」

「……はい。俺は、平気です。だけど……」

「……言いたいこともあるだろう。かくいう俺も、疑問が多すぎてまだ状況を把握できん。だが、今はこれでいい。一旦引くぞ」

グレンはそう言うと、地上への階段を上り始めた。その大きな背中が、少しだけ小さく見えたのはきつと気のせいなんかじゃない。

「……行こう、キリヤ」

「ハクア……」

「皆、疲れてるよ。今日はもう、ゆっくり休もう。ね？」

「……そう、だな」

一つも納得できたことなんてない。悔しさと無力さだけが胸の中にひしめいていた。それ以上に、体が鉛のように重かった。ひとまの帰還。真実は今も、闇の中。

第十五話 石と意志

夢を見ていた。名前も顔も知らない大勢の人々が、一斉に手を伸ばしている。誰もが死に物狂いで手に入れようとしているそれは、青白い不思議な光を放っていた。それでいて、それは誰の手にも渡らずにいた。まるで光を放つことで、周囲を拒絶しているかのように見える。

いつになっても誰の手にも渡らないそれに、痺れを切らせた誰かが言った。これは俺のものだと。違う誰かが続けて叫んだ。ふざけるな、これは俺のものだと。また違う誰かが叫んだ。どちらでもない、俺のものだと。その繰り返し。気が狂いそうになる時の流れの中で、それだけを執拗に繰り返す。まるで何かに取り憑かれているかのよう。他人を押し退け、我先にと手を伸ばす。届かないその手を伸ばし続ける。

だから、だろうか。ふと、青白い輝きを放つそれは、輝くことをやめた。辺りが暗闇に包まれる。あれだけうるさかった人々の声が、途端に消え失せた。それは眠り。長く永い、目覚めが訪れるかどうかも分からない、深い眠り。次に目覚めるのは、いつの時代のどの場所か。それは、それ自身にも分からない。

とにかく寝た。それ以外を体が受け付けなかったと言ってもいい。食事も水も喉を通らなかつた。鉛のように重くなった体は、ベッドに沈むとすぐに深い睡魔に襲われ、そのまま深い眠りに着いた。そして一夜が明けて、ようやく体の重苦しさが少しはなくなった頃、キリヤは静かに目を覚ました。

「起きたか」

「……アクセル？」

キリヤが起き上がると、ちょうど部屋の中にアクセルがやってきたところだった。窓の外の太陽を眺めると、もうずいぶん高い位置に昇っている。どうやら昼を過ぎていようだ。

「よく眠れたみたいだな。腹は減ってるか？」

「……いや、減ってない」

「なら、水だけでも飲んでおけ。飲まず食わずじゃ、本当にぶっ倒れるぞ」

アクセルは透明なグラスを差し出し、キリヤはその中の水を飲み干す。一息ついて、ようやく頭の中がはつきりとしてくる。

「さて。俺はこれから城に出向くことになっている。おそらく夕方までは戻れないだろう」

「城に？ 何しに行くんだ？」

「昨夜のことを、陛下に報告するためだ。俺だけではなく、グレン殿も呼ばれている。本当なら現場にいたお前も同行すべきだが……その様子じゃ、まだ無理はしないほうがいいだろう」

「……」

「ハクアは隣の部屋にいる。落ち着いたら顔を見せてやれ。ずいぶん心配していたぞ」

「……俺も、行く」

「無理をするな。お前、自分が今どんな顔してるか分かってないだろう？」

「それでも行く。大丈夫だよ。俺だって、王様相手に失礼な態度は取らない。余計なこと喋ったりはしない。それに……」

「それに、何だ？」

「……ちよつと、気になることがあるんだ。ただの気のせいかもしれないけど」

「……やれやれ。まあ、どちらがいいといえは同行してくれたほうがいいのは確かだしな。なら、すぐに準備をしる。俺は宿の外で待っているからな」

それだけ言うと、アクセルは部屋を後にした。残されたキリヤは、もう一度目を閉じてわずかに考える。さっきまで見ていた、不思議な夢のことを。正直言って意味が分からない内容だった。ただ、あの青白い光を放つものには見覚えがある。形までは分からなかったが、その放つ輝きは良く似ていた。昨夜、盗み出されたあの石に、

城内、謁見の間。

端から見れば無駄に広く作られた空間だった。玉座が置かれた壇以外には、これといって目立つものはない。玉座を挟むようにして国旗がそれぞれ掲げられているくらいで、それ以外は実に殺風景な印象を受ける。

「来たか」

「遅くなって申し訳ありません、グレン殿」

アクセルとキリヤが謁見の間に通されると、そこにはすでにグレンの姿があった。相変わらずの重量感のある銀の甲冑に身を包んでいるが、その左腕だけは剥き出しの肌の上に白い包帯が巻きつけられている。グレンの表情そのものに苦しそうなところはないが、傷は軽いものではないの是一目で分かる。真新しい包帯が、逆に傷の痛々しさを強調しているようにも見える。

「何、俺も今来たところだ。間もなく陛下も来られる頃だろう。それより……」

グレンの視線がアクセルからキリヤに移る。目が合い、キリヤは無言で頭を小さく下げた。

「大丈夫か、キリヤ？」

「はい。俺は、平気です。怪我もしてませんから」

「そういう意味ではないのだが……まあいい。陛下が来られたら、まずは俺から大まかな説明をさせてもらおう。しかる後に陛下から問われることもあるだろうが、緊張する必要はない。昨夜起こったこ

と、その目で見たことをそのまま話せばいい」

「……分かりました」

「……いいか、キリヤ。勘違いをしているようだが、これは誰に責任があるかを議論する場ではない。現状を把握し、これからの対策を講じるための話し合いの場なのだ。もしお前が昨夜のことを自分の失態のように感じているのなら、それはいらぬ錯覚だ。今のうちに捨ててしまえ」

「はい……」

「……ふむ。どうなんだ、アクセル？」

「……キリヤの性格からして、すぐに割り切るのは難しいですね。」
キリヤには聞こえない程度の小声で二人が話す。

「こいつは……自分のせいで他の誰かが傷つくのを人一倍嫌います。それが自分に近い人ならなおさらに。そうなるくらいなら、自分が傷ついて、傷だらけになってしまったほうがましだって……そう考えてしまっやつなんです」

「……何か、理由があるようだな」

「……ええ」

そこまで話したところで、太鼓のような音が謁見の間に響いた。国王がやってくる時の合図だ。ほどなくしてこの間に通じる大きな扉が開き、その向こうから待っていた人物がやってきた。クリストフ・ウィル・リリアネス。八代目クリストフ王だ。

「面を上げよ」

それが王の最初の言葉だった。片膝をつき、視線を下に向けていた三人が静かに顔を上げる。クリストフ王は、王と呼ぶにはあまりにも若く見えた。正直な感想としては、グレンよりも若い顔つきだ。だが、その風格には確かに王としての威厳や誇りのようなものが見える。その反面、王は同時に若い青年にも見えた。整った顔立ちに金色の髪。体格は細身で、背丈も平均程度。見た目二十代半ばくらいの年齢に見えるが、もちろんこの場でそんなことを確認すること

はないし必要もない。やや間を置いて、グレンが静かに口を開いた。
「騎士団長グレン、並びに遊撃騎士アクセル、証言者キリヤ。登城の命に従い参りました」

「ご苦労だった。ときにグレンよ、負傷した左腕は大丈夫なのか？」
「は。騎士としての勤めには支障ございません。ご心配をおかけいたしました」

「そうか、ならいい。では早速で悪いが本題に入らせてもらおうとしよう……………」が、その前に

と、王は一度言葉を区切ると小さく嘆息した。思い悩んで出た溜め息というよりも、あきれ果てたという意味合いの一息だった。その理由はすぐに明らかになる。

「グレン。一応形式上というのは分かるが、その言葉遣いはどうにかならないのか？ 俺は確かに王で、お前は国に仕える騎士だ。そこにある主従関係は認めるが…………俺はやはり、こういう堅苦しい言葉遣いは苦手だな」

「…………陛下。私だけの時ならまだしも、この場にはアクセルとキリヤもおりますゆえ。無理してでも王らしく振舞ってくれねば示しがつきませんでしょう」

「無理だ。俺は普通に喋らせてもらおうぞ。だからお前も、もう少し肩の力を抜け」

「いえ、しかしですな……………」

「黙れ。命令だ」

「……………」

その一言でグレンは押し黙った。というより、今度はグレンが呆れてものも言えないようになっていく。その巨体に見合う大きく深い溜め息を吐き出すとようやく観念したのか、静かに立ち上がる。

「分かりました。陛下の命とあらば、騎士である自分が逆らうわけにはいかんでしょう。全く持って、ただの職権乱用と変わらぬではありませんか」

「そう言うな。私にとっては、お前は兄と同じような存在なのだからな。弟の我侭に付き合うくらいは器の大きさがなくて、騎士団を束ねることなどできるものか」

にやりと笑って王は言う。そんなやり取りをただただ眺めているだけしかできないアクセルとキリヤは、すっかり会話からはぶられてしまっていた。

「……と。すまないな二人とも。改めて自己紹介といこう。俺がクリストフ・ウイル・リリアネスだ。この国の王座に座らせてもらっている」

「あ……じ、自分は王国騎士団所属遊撃騎士、アクセルと申します」「キ、キリヤと申します」

「アクセルにキリヤだな。よし、覚えておくぞ……ん？ おいキリヤ、お前のその鎧は騎士見習いに対して贈られるものだったな？ ならば、お前も騎士の見習いということか？」

「あ、いえ……その、そうだった、と言いますか……」「そうだった？ どういうことだ？」

「それは……」「陛下、それについては私が説明しましょう」「何だ、グレン。お前と関係あることなのか？」

「先日報告した、人売りの事件に関することです。覚えていらっしやるでしょう？」

「ああ、報告は聞いている。任務は成功だと聞いているが」

「このキリヤもまた、騎士見習いとして任務に同行していたのです。確かに任務は成功とって良いですが、そのさなかでキリヤがアクセルの指示を無視し、部隊全体を混乱させたのもまた事実。よって私は昨日、騎士団長としてキリヤの騎士見習いの称号を剥奪いたしました」

「……………キリヤ、本当か？」

「……はい。グレンさんの言うとおりです」

「お前は全てを納得した上で、受け入れたのか？」

「……それ、は」

「どうなんだ？ 正直に言え」

「……未練がないと言えば、嘘になります。ずっと、騎士になるための道を歩んできました。素人なりに足掻いて、どうにか見習いの試験にも合格して、次はいよいよ昇級試験だって息巻いてたときにこの有様ですから。けど、自分が取った行動が他の人達にならぬから迷惑をかけたことも、よく分かっています。称号は剥奪されてしまいましたけど、時間が経てば再試験を受けることもできるので……」

「なら、また一からやり直せばいいって……今は、そう思っています」「偽りはないか？」

「はい、ありません。それに……」

「それに？」

「……ここで騎士になることを諦めるのは、それは同時に俺を今まで支えてくれた人達を裏切ることになってしまうから。だから……もう一度、前に進みます。時間はかかるけど、いつか辿り着けるって思っています。昔、誓ったんです。騎士になろうって。騎士になって、誰かを守るだけの強さを手に入れて、誰かを守るために剣を振るおうって。その目標だけは、まだ諦められません」

「……そうか。目標、か。夢ではなく、目標な。なるほど、そういう考え方も、確かにあるかもしれない」

「陛下？」

「ああ、すまん。少し思い出していただけだ。昔のことをな」

そう言って王は笑った。どこか満足そうに笑っていた。

「さて。ずいぶんと話が逸れてしまったが……本題に戻るか。昨夜襲撃を受けた、地下聖堂と盗まれた宝物について、まずは俺の知っていることを話そうと思うが、いいか？」

三人は無言で頷いた。今までの緩んでいた空気が変わり、わずか

に張り詰めた空気が流れ始める。三人の顔を見渡して、王は話を始めた。

「結論から言ってしまうと、地下聖堂に踏み込まれたことに関しては気にしなくていい。もともとあの場所は王族以外の人間が侵入できないよう、古くから特殊な結界が施されていたはずだ。これは推測だが、結界が施されたのは今から三百年以上も前とされている。長い年月を経て、おそらくはその結界が弱まり、消滅してしまったと考えられるからだ。詳しいことは今調べさせているが、ほぼ間違いないだろう。問題なのはそっちじゃない。盗まれた宝物の方だ。この中で、あれを見たやつはいるか？」

「……その宝物というのは、青白く光る石のことでしょうか？」

「そうだ。そしてもう気付いているとは思うが、あれはただの石ころなんかじゃない。かといって、宝石というわけでもない。確かに価値はあるだろうが、金目当てで盗むような代物ではない」

「では、一体……」

「あれは武器だ」

「……武器？ あの石が？」

「そう。だが、あれだけではその真価は発揮しない。もう一つ、必要なものがある」

「と、言われますと？」

「……願いだ」

その言葉に、三人は言葉を失った。話が飛躍しすぎている気がした。あの石が武器というのもすぐには領けないのに、それに続いて願いが必要だという。どう組み合わせれば、このパズルは解けているのだろうか。そんな思惑をよそに、王は言葉を続ける。

「想いや祈りと言い換えてもいい。そうだな、意志と表現した方がしっくりくるかもしれんな。まあ、とにかくだ。しゃれでも何でもなく、あの石と意志が揃って初めて、それは一つの武器となる。世界を変えるほどの力を持つといわれる、強大な武器にな」

「……にわかには信じられませんか」

「同感です。まるで、御伽噺か何かのように聞こえてしまいます」
「普通はそうだろうな。だが、史実としてこれは確かな話だ。過去の歴史の中にも記されている、確かにあったことなんだ。俺の調べた限りでは、その強大な力は全て争いを終わらせるために使われている。その力を以つて、勝利に導いたということなのだろうな」

「……何なんですか、あの石は？」

絞り出すような声でキリヤが聞く。今の話しは確かに突拍子もないものだったが、キリヤにはほんの少しだけ心当たりがあった。今朝見た夢の中に出てきたもの。それも宝物と同じ、青白く光る石のようなものだったからだ。それをただの偶然で済ませることは簡単だが、同時にひどく恐ろしくもあった。

「……共鳴石」

王の口から聞いたこともない言葉が出る。

「あの石は、自ら持ち主を選ぶ。そして持ち主の強い意志に共鳴すること、その姿を武器へと変える。それが剣なのか槍なのか、斧なのか弓なのか。それは誰にも分からない。ただ一つ言えることは……」

一拍の間を置いて、王は再び口を開く。

「持つ者が持てば、世界を滅ぼすことも不可能ではないだろうな」

第十六話 ひとまずの区切り

水平線の向こうに夕日が落ちていく。空と大地の境目は、どちらもオレンジ色に染まっていた。海から吹く風は少し冷たく、空を飛ぶ鳥の群れの姿も今は見えない。

「何してるの、キリヤ？」

「……ハクアか」

背中から聞こえた声に振り返ると、そこにハクアがいた。ここはすでに船の上。キリヤとハクア、そしてアクセルは夕方に王都を出て、こうして再び船に乗ってジェリオの街へと帰る途中だった。

あの後、王ともう少し話を交えてから出された結論は、とりあえず保留ということになった。いわく、王都だけではなく国のあちこちで最近不穏分子の動きが活性化しているということだった。敵側の組織図も構成も目的も、何一つまだはつきりとしたことは分かっていないらしい。推測ではあるが、先日の人売りの一件ももしかしたら関連性があるのかもしれないということだった。表立ってこちらから動いては、敵側の方が息を潜めてますます見当もつかなくなる可能性が大きいので、しばらくは泳がせながら手がかりを追いかけることになる。

「大丈夫？」

「……何がだ？」

わざとらしくキリヤは聞き返した。嘘をつくのが得意というわけではなかったが、何とかごまかしておかなくてはいけない。ハクアにはまだ何の事情も説明していない。城に出向いたのも、騎士団関係のことでちょっと用事があるということにしておいた。わざわざ馬鹿正直に全てを説明するつもりは毛頭ない。説明すればそれだけで巻き込まれたことと同意だ。お世辞にも穏やかな解決が見込めそうとは言えなかった。それならばいっそ、隠し通してしまっただ方が

いいに決まっている。

「……大丈夫だよ。何でもない」

だからキリヤはそうとだけ答える。必要のないことは話さない。例えその結果、騙すことになっても。

「ほんとに？」

「ああ。大丈夫。平気だつて」

「……そう。でも、信じられないな」

「……何が？」

わずかに驚いたように言うハクアに、キリヤは少し引つかかりを覚えた。何となくだが、お互いの会話が噛み合っていないように思えたからだ。ハクアの信じられないという言葉は、疑心ではなくもつと他の……驚愕のような意味合いで発せられたような気がした。その理由は、実に簡単だった。

「船酔い、ほんとに大丈夫なの？」

直後に、忘れていたように吐き気がやってきた。

「……わ、忘れ……てた……」

「え、え？ ちょっとキリヤ、しっかりして!？」

月が出た頃、キリヤ達を乗せた船はジェリオの街へと到着した。丸一日離れていただけなのに、妙な懐かしさを覚えてしまいそうになる。

「よお。お帰り」

港へ降りたところでそんな声がした。見ると、そこにはユーグの姿がある。

「ユーグ。わざわざすまない、迎えに来てくれたのか？」

「いや。逃げてきた」

「……逃げて？」

「何から……って、おい、まさか……」

言いかけて、キリヤはさっきまでの吐き気を忘れるくらいに嫌な予感がした。冷や汗が落ちる感覚が手に取るように分かる。その様子がアクセルにも伝わったのか、似たような表情を浮かべたアクセルが小声で呟く。

「……メルFINE、か……？」

「おう。死ぬとこだった！」

ユーグはびしっと親指を立てて言い切った。その目からはどういうわけか、きらりと輝く男の汗が溢れ出ているように見えなくもない。

「え？ え？」

と、ハクアだけがまだ何も分かっていないようであたふたとしている。念のため確認するが、あんな事があつたので三人は買い物なにしてしている暇はなかった。こうして街に帰ってきた今も、当然のように軽装備である。誰の手にも、頼まれた食材のぎっしり詰まった買い物袋なんてものは握られていない。それを一通り確認した上で、ユーグは言った。

「もう、だめかもしれない」

「……すまん。わざとじゃないんだ、わざとじゃ……」

「……終わった」

ハクアを除く三人は同時に思った。世界の終わりよりも怖いものは、こんな身近にあつたのだと。

ギルド【雨宿り】が生活を共にしている建物は、もともとは小さな宿屋として使われていた建物だ。築年数はかなり経っているのでお世辞にもきれいとは言えないが、見た目以上に造りはしっかりしている。しっかりしているのだが

「……な、何ですか、これ……？」

開口一番、ハクアはそう言わずにはいられなかった。

「……すでに、手遅れだったか」

「言っただろ。逃げてきたって」

「自慢になるかよ……」

四人は呆然と建物の前で立ち尽くしていた。まず外観がおかしい。玄関の扉がない。いや、正確には元玄関の扉であったものらしき木の板が、真つ二つに割られて地面の上を転がっていた。他にも数ヶ所、壁に穴が開いているところがある。驚くべきなのは、それらが全て素手で思いつきり殴りつけられたことよって開いた穴だということだ。

「メルフィネのやつ、何もここまでしなくても……」

「えー!? こ、これって、メルフィネさんがやったんですか!?!」

ここにきてようやく周囲の溜め息の意味を知るハクア。まあ、ギルドの一員になって日の浅いハクアが理解できないのも無理はない。無理はないが、今は無理にでも理解してくれないと困る。

「……で、どうすんだよ?」

「どうすると言われてもな……」

まさか自分達の家である場所にやってきておきながら、踵を返して立ち去るわけにもいかない。だが、あの家には今は帰りたくない。と本能が告げている。視線の先にある玄関の向こう側、そこには確実に魔物が棲んでいる。それだけは間違いないし、確認したいとも思わなかった。

「……アクセルが行けよ」

「な!? キリヤお前、自分が嫌だからって……!」

「頼りにしてるぞ、マスター。大丈夫、お前ならできる。俺は信じてる」

「あさつての方角を見ながら言うんじゃないユーグ! それとお前、目が死んでるぞ!」

「……えーっと」

「ぐ……!」

アクセルは齒噛みする。絶対にそんな役回りはごめんだが、すでにキリヤとユーグは他人任せモードだ。かといってハクアにそんな役目を押し付けるわけにもいかない。そうなるともう消去法で自分が行くしかなくなるわけだが、命を粗末に扱うのはどうかと思う。騎士道に反する。とはいえ、仮にもギルドマスターという立場上、ギルド内での問題は解決しなくてはいけない。マスターにはその権限があり、また責任がある。そうだ、俺しかない。俺がやらなければ誰がやる。メルフィンだって話せば分かってくれるはずだ。それに中には、まだリノとアルフレッドが残って戦っているはずだ。二人を救うためにも行かなくてはいけない。

「……よし。俺が行こう」

覚悟を決め、アクセルが動く。騎士として、ギルドマスターとして、一人の男として。無益な争いを止めるために、勇敢な男が今歩き出す。その後ろでキリヤとユーグが静かに合掌している姿などには気付きもせずに。がんばれアクセル、負けるなアクセル。大丈夫、君ならできる。ギルドの平和を取り戻すために。屋根のある家を取り戻すために。君の勇姿は、きつと忘れるまで忘れない。

その背中が家の中に消える。物音はしない。案外もう、メルフィンには大人しくなっているのかもしれない。

「……なあ、ユーグ」

「ん？」

「リノとアル、中にいるのか？」

「いや？」

「え……？」

「とつくに逃げたよ。俺が最後」

「……やっぱりな」

「え……ちょ、それって、それって……えええええっ!？」

ハクアが思わず叫びかけた、その直後。

「　　ぎゃあああああつ!?　待て落ち着けまずその振りかぶったテーブルを下ろせ危ないだろ話せば分かる聞いてくれ聞けよ聞いてくださいお願いしますってばあああああつ!?!」

騎士の断末魔が響き渡った。ハクアはその悲鳴に思わず耳を塞ぎ、驚きのあまり一歩身を引いていた。キリヤとユーグは、揃って星を見ていた。

王都の南側には砂漠地帯が広がっている。砂漠の中心にはコゼツトの街があり、そこは王都と南大陸を結ぶ交通路の基点として賑わいを見せる街だ。そのコゼツトからは大分離れた、おおよそ旅人のルートから外れた砂漠の端に岩石地帯がある。その一角を利用して造られた小さな洞窟があることを、多くの人々は知らなかった。

「ま、終わりよければ全てよしってやつかな。こうして目的のものも手に入ったわけだし」

洞窟の中、そこはもはや一つの集落のような場所だった。生活感が溢れ、五十人ほどの人々がそこで生活を共にしている。もっともこんな人目につかない場所で生活をしなくてはいけない、それなりの事情とやらも抱えているわけだが。

「何がよしなのか、説明願いたいな。君の手際が悪いおかげで、無駄な時間と体力を使う羽目になった私はひどく不愉快だ」

リズの言葉に反論したのは、共にあの地下聖堂から脱出した魔術を扱う男のものだ。見た目こそ少年の容姿なのだが、言葉遣い一つで印象ががらりと変わっている。必要以上に長く伸びた前髪が目鼻を覆い隠しているせいで、表情が読めない。もっとも、それ以上に少年の感情は希薄ではあるのだが。

「あーあーそうでございますか。感謝してますよステラ様。これで

「いい？」

「……………」

リスの態度に呆れ、ステラはそれ以上何も言わなかった。これ以上続けたところでまた余計な時間と体力を使うことは目に見えているからだ。

「さてと。あとはこれを依頼人に渡せばお仕事完了ね」

「約束の時間までもう少しだな。そろそろコゼットに向かった方がいいのではないか？」

「そうみたいね。それじゃ、ひとつ走り行ってくるわ」

「……………リス」

「ん、何？」

「……………いや、何でもない。気をつける」

「何よ、気持ち悪いわね……………ま、忠告は受け取っておくわ。近頃物騒だしね」

本当に物騒なのはどっちか分かったものではないが、ステラは口には出さずにその言葉をのみ込んでおく。物騒なのは間違いない。自分達にこんな依頼が舞い込んで来るくらいには。

「……………君はこうして、自分の手を汚し続けるつもりなのか？」

届かないと知って、ステラは呟いた。届かないと知っていたからこそ、口から出た言葉なのかもしれない。少なくとも、真正面から同じ問いを投げかけることはできそうにない。

「……………」

もう一度何か言いたそうに、しかし結局何も言わぬままステラは洞窟の奥へと戻った。言えるわけがない。このままでいいのかと、問い質すことなんてできない。できやしない。全ての原因は自分にあることを、ステラは誰よりも良く理解していたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032x/>

GUILD -還るべき場所-

2011年11月9日01時02分発行